

を叩いてコックリして曰く「ハアよろしい萬々承知」と、直様去つて齋藤の傍に待す、酒酣にしてお須磨お銚子のち代りに起ち、還つて而うして忙はしく報じて曰く「齋藤様も電話口！」と、渠乃ち何心なく起つてそこへ出づればお須磨透さず尾行し來つて不意に背後から組付さ、叱咤女軍を起たしめて以て矢庭に渠を胴揚にす、こゝに於て流石の棒鱈、酒目と共に廻つて到頭へ、レケに酔つ拂ふ。

### 小川鉦吉圍碁に有望なり

日本郵船會社取締役小川鉦吉圍碁を學んで、久しく井目仲間を脱する能はず、以爲く、乃公はこれぎり碁が上らぬかしらんと、去つて碁伯の某

に質す、曰く「迎も上らぬ碁なら斷然廢止やうと思ふが、先生どうでせう」と、某微笑して答へて曰く「ナニ廢止るには及びません……足下は大に發達する餘地がありますから」と、然り渠は未だ手談界に一步の地盤も占領せずして、其前途は全然餘地のみなればなり。

### 土肥慶三年賀の名刺に失敗す

醫學博士土肥慶三は頗る詩味ある一紳士なり、或年元旦年賀に出かけて縦横市中を押廻し、今村繁三の家に至つて始めて名刺の欠乏せるを心付く、渠即ち同家の電話を假りて自宅へ急信して曰く「尙諸方へ廻るのだから、急いで名刺を築地の兄貴の許まで届けて呉れ」と、受信者早合點



に畏つてチリ、ン一聲電話を切れば、慶三時を計つて築地の兄貴の家に  
到る、兄貴訝り見て口を尖らして曰く「オヤ／＼君は今日見えぬと言ふ  
て今がた使に名刺を投込ませたぢやないか」と、以て窺に其略式を含め  
るものゝ如し、慶三ギヤフンと參つて據なく白狀して曰く「夫は大失敗  
實は名刺を澤山此家へ届けて貰ひ、それを持つてまた諸方へ廻る積りな  
のだつた」と、終に年始をお仕舞にして餘儀なく其處へへたばる。

### 松尾長太郎又能くのろく

嘗て三井物産長崎支店長たりし松尾長太郎は長崎第一の粹客なり、先頃  
愛妾零子を殘して單身で上京するや、翠想紅夢感極まつて、往々手放の

惚氣を振廻す、一夕渠宴會に臨み散々涎を冷かされて悄然歸つて寢室に  
入れば不思議不思議！戀しの零子は茫然ここに坐つて嬌光一闪顧みて而  
して「アラまあ契郎」と縋り付く夢か夢に非ず、現か現なれと祈れる渠  
は又吃驚ギョツとして怖々女の背を撫で、左顧右眄して全く其夢ならざ  
るを知り、故に色を作してあれ程言つて置いたに何故出て來たと叱すれ  
ば、零子は恨し氣に臉をしばたゝひて「憎らしい、病氣だから直來いと  
云ふ電報を二度まで下すつておきながら」と泣く、サア解せない、上京  
來ピン／＼健強で惚氣てはつかりゐたる渠「待てよく／＼」と腕拱ひて、  
暫く考へて、膝を打つて、垂頭て而して微笑して曰く「これは適切益田  
の太郎さんの悪戯だらう、マア可いお零泣くな」と、終に手元へ留置い



て、或は觀劇を驕り或は三越吳服店に奮發す、太郎蔭にて舌を出すこと三寸。

### 河上謹一浮世の縁繋ぎ

一度住友の理事を辭して悠々須磨の浦曲に閑月を樂む河上謹一、突然滿鐵の重役に推されて實業界の人となる、人あり問ふて曰く「足下今回の出陣殆んど意外の感なくんばあらず、思ふに敏腕後藤總裁の勸誘もだし難きに由らん」と、謹一曰く「否、余は總裁に一面の識なし、恐らく浮世の縁繋ぎに誰かゞ隱居を召ひ起したのであらう」と、洪笑一番又何人の推薦に係るを知らず。

### 岩原謙三の喜び損

三井物産會社常務取締役岩原謙三一夕築地の新喜樂に遊んで快醉時を移す、座に新橋の清香あり銚子を執つてお一つ注ひて且つ曰く「岩原さま、貴郎に是非お目にかゝりたいと云ふ人があるんですが、お會ひ遊ばして下さいますか」と、謙三的切り乃公に岡惚れ校書の戀信と思ひ、男兒焉んぞ諾せざるべきと、乃ち態と「會つてやつても可いが、だしぬけぢや困る……ソシナラ明後日の晩、木挽町の例の待合で」と、獨り合點て場所と時とを決定し、且つ問ふにその會ひたい妓の誰人たるを以てすれば、清香莞爾として答て曰く「早速御承諾下さつて有難う、貴郎に



會ひたいと云ふ方は子……小村伯爵の御子息さまですよ』謙三聞いて大に惰化かへる。

### 内藤久寛青年を教化す

日本石油會社長内藤久寛部下一青年の勤務に精勵ならざる者を拉へて從容として問ふて曰く『君は更に出世を好まざるか』と、青年曰く『否、僕大に出世を志す』又問ふ『君は常に「實業之日本」を讀むか』曰く『否、讀まず』久寛こゝに於て徐ろに言つて曰く『だから不可んのぢや、凡そ人東に赴かんと欲すれば一步を東に運び、西に赴かんと欲すれば一步を西に運ぶ、余今君の平生を察するに行志と合はず、恰も新潟へ赴かん

と欲して足は即ち高田へ向へるに異ならず、何ぞ其れ方向を誤れるの甚しきや、『實業之日本』は青年成功の指南車なり、君乞ふ之を讀んで以て覺れ』と、青年唯々として去つて實業之日本を愛讀し、遂に非常の勤勉家となる。

### 高木益太郎英人の雅量に感ず

高木益太郎嘗て倫敦に遊び、時英國駐劄全權大使小村伯爵を叩ひて諸方へ紹介を頼まんと欲し、門に到つて忝しく刺を通ずれども伯爵不快と稱して出て會はず、渠即ち門前拂ひを喰つて快々として以爲くまゝよソナラ直接に英人を訪問してみやうと、直ちに馬車を驅つて倫敦市長を尋



ぬれば市長は歡んで之を迎へ、いろくお世辭を並べて一見舊知も嘗ならず、去つて商業會議所に赴いて會頭を訪へば到る處優遇意外に出て毫も大使の紹介を要せざりき、渠こゝに於て長太息して獨語すらく『英國紳士はいづれも御役所風がなくて自然に好外交家たるの雅量を有してゐるから羨ましう。』

服部金太郎主家の危急に赴く

服部金太郎幼時下谷の某家に丁稚となつて儉約三年、辛うして七圓の貯蓄をなす、偶主家商業に失敗して俄に分散の不幸に遭遇し、昨日の旦那は今日の宿なしとなつて殆んど身の置所なし、金太郎時に齡十六慘然其

不遇を哀悼して終に三年の貯金を献げ、以て主家危急の一端を救ふ、議者相傳へて轉た斷腸

村井吉兵衛茶壺攻に會ふ

村井吉兵衛美術に遊ばんと欲して九鬼隆一を京都の僑居に訪ふ、隆一曰く『古畫佛像はモウ屑ばかりに爲つて良いのは容易に見付からない、只茶壺の類は人が氣付かぬから珍品が随分残つてゐる』と、吉兵衛よい耳と喜んで去つて茶壺を穿鑿すれば、滿洛の道具屋奇貨居くべしとなしてドシ／＼茶壺を擔ぎ込み、幾ばくもなくし





て千百の駄茶壺吉兵衛の居間を奪掠す。

山邊丈夫貴女を驚かす



大坂紡績界の尤物山邊丈夫先年西洋に遊んで途に米國の寢臺列車に乗る、長途日暮れて涼風窓に動き孤燈睡魔を召んで旅情譬ふるに物なし、乃ち上の寢臺の空なるまゝに、荷物を上げてゴロリ轉げて故山を夢みれば、汽笛闇を破つていつしか目的地の近づくを報ず、時既に天明、渠こゝに於て倉皇起きて衣紋をつくるひ、猿壁を伸べて上の寢臺を探れば何んだか手ざはり温かに且つ柔かくして荷物は薩張り手に當

らず、そこかこゝかと掴み廻せばキヤツと一聲悲鳴は響いて晴天落雷の思をなす、南無三！荷物と思ひしは貴女の白脛。前夜自分の睡眠中、上の寢臺へ來りしもの山邊叩頭慙謝、這々に逃出す。

梅浦精一化の皮地藏に剝かる



梅浦精一越後へ出かけて寶田石油會社の渡邊藤吉清水常作等と高田の高陽館に泊り込む、以爲く旅の耻はかき棄てと因て偽名を宿帳に記て藝妓を揚げて底拔騒をやらかし、得々以て得たりと爲す、翌旦渠は蹣跚として市街を散歩し、偶見當る石



地藏を買來つて館主を召んで宅廻しの荷作を頼む「アツしまつた、それは宿帳の名前では届かぬ」と、こゝに至つて到頭梅浦精一の本名を白状す。

### 渡邊亨鼻毛の伸びたるを知らず

鬼怒川水力電気株式會社常務取締役渡邊亨去歲柳橋の某家に遊んで藝者を揚げて頻りに通を振廻す、者の曰く「そんなら貴郎松尾太夫さんを御存知？それは／＼常盤津が巧くつて林中さん以來の名人だつて評判よ、嘘だと思ふなら今度召んで御覽なさいな」と、後數日亨音曲通の理學博士田中正平に會つて眞面目になつて太夫の藝評を問ふ、然れども、

正平俄にそんな名人を思出さず、少焉て哄笑一番「解めた／＼それは顔の綺麗な……藝妓が目を細くしてお師匠さん／＼と君よりも大事にした好男子だらう」ピシヤリ亨の肩を叩いて「しつかりし給へ君！ウワツハツハ——」

### 岩崎久彌漁翁を欺く

岩崎久彌は謹嚴剛直、人も知る滅法眞摯の一大紳士なり、こゝを以て其道樂も亦軒並外れた蠻柄武骨の役網に在り、夫れ業を勉むるに精しく怠るに荒むとか、況んや勉を過ぎての道樂に於てをや、炎天波平に風穩なるの日、久彌網を執つて品海に乗出せば、水底の魚介唼喙如として皆



其畚に入らんことを希ふと云ふ、其夏渠例に依てお臺場近所へ出かけ、筒袖腰篋スツトコ被りの手拭顔と共に黒つぼくして打つ手引く手の網捌はさながら灣頭の老漁夫に異ならず、日暮れ櫓を押し波を蹴つて歸るの漁船遙に注視して以て窃に其打ぶりを嘆賞し、船々過ぐるに當つて各磯ぶりの敬意を表し、「兄いしつかり獲れたな」と祝して終に其久彌たるを知らず。

### 山本達雄終に道樂に勝たず

山本達雄は投網天狗黨の旗頭なり、一時は投網を提げて待合のお神を驚かしたれども、一朝咬打して誤つて前歯を缺きたるに懲りて斷じて網を

廢せんと決心し、平生知る所の齒科醫一井正典を尋ね、譯を話して義齒を頼む、而して一ノ井は又投網の狂人なり、叱して曰く「そんな弱い音を出して堪るものか、やるべし」ドシクやるべし、足下にも似合はな」と。達雄好きの道とて御説諭御道理と靜聽し、到頭決心を翻へしてまたく投網に耽る。

### 安田善次郎弱點を見透かさる

森清右衛門は東都有數の請負師なり、日露兵を交ゆるに當つてや、渠能く砲煙彈雨の間に往來して熾に陸軍の用を辨じ資本はいつても安田善次郎に仰ぐ、曰く「今度の仕事は素敵に儲かる」曰く「又一口錢儲が舞込



んだ』曰く『何』曰く『何』と、親方氣質の負けず嫌は悠々萬事を樂觀していかなる困難に出會ふもツイに一度も顔を顰めたる事なし、而して善次郎は共進共益主義の素天邊にして儲かつた話を聞くと金を貸す氣になる男なり、こゝを以て其儲話に乗せられて到頭三十萬圓許を引つ懸けらる、識者以て善次郎弱點を見透かさるとなす。

### 馬越恭平スloop攻めに遭ふ

馬越恭平往年南清視察に出かけて林權助、山口俊太郎等と外國船に乗て香港に向ふ、船揚々として上海を發し、厦門を過ぎ食堂に入つて晚餐に就けば、ボーイ直さま献立書を齎して各欲する所を問ふ、同行は皆英

佛の博言者なり、ペラ／＼御馳走を命じて談笑他事なきも、恭平獨り他國の啞盲にして何が何やら薩張解らず、然れども林や山口に問ふは業腹、斯うして呉れると、都度々々献立書を指して自ら以て得たりとなせば、其指生憎同點に當つて三度が三度スloopのお代りに責立らる、恭平恐縮ボーイ呆然。

### 土倉庄三郎の美德

大和の豪族土倉庄三郎は日本第一の山林家なり、畿内數國に跨る幾百千町の山林大樹森々として殆んど渠の所有にあらざるはなし、由來山林の災害は山火事の猖獗に在りて、等しく山林家の頭痛に病む所なれども、



土倉の山林に至つては何十年來一度も其災害に罹りし事なく、庄三郎と雖も更々其所以を知らず、堵人に問へば曰ふ「土倉は我々の恩人なり、渠は能く人の樂を樂み、又能く人の憂を憂ふ、若し其山林に火あらしめんは我々の耻辱なり」と、果然堵人土倉の山林に入れば斷じて好きな煙草を喫まず、途上若し土倉の農具の遺棄されたるを見れば必らず拾ふて之をその家に送る、乃ち知る其山林に火なきは實に渠が徳望の高さに由れるを。

### 鈴木藤三郎頑として東洋主義を持す

鈴木藤三郎往年歐米を漫遊して獨國に入るや伯林の名士夙に其名を知る

者相争ふて之を招待す、渠乃ち在伯の知人藤山治一を通譯に頼んで俱に供に之に赴き、臍の緒切つて始めて洋流家庭の御馳走に與る、食堂に入るに先だち治一豫め訓へて謂へらく「食卓の案内を受けたら主賓の足下が當家の奥さんの手を引ひて食堂へ入るのです、出る時も猶丈同様ですから、其心算で巧くもやんなさい」と、藤三郎色を作して怒て曰く「ナニ他人の細君の手を引ひて出入すると、馬鹿な事を、そんな眞似が出来るものですか」曰く「イヤそれが西洋の禮だから仕様がな、どらぞさうして下さ」曰く「ヤ出来ん」「是非そんなら還る」「ぢやア困る」小屋紛擾の倭白は幸にして亭主の耳に入らざりしも時刻は切迫、治一遂に勝つ能はずして餘儀なく名代を勤む。



安田善次郎舊恩を忘れず

安田善次郎其昔小網町に錢兩替の店を開いて其日の活計を立つるや、當時世間は渠の臥龍鳳雛たるを知らず、呼ぶに錢屋の善坊を以てして、未だ曾て眞面目の様號を附る者あらず、獨新川の酒商中澤彦吉は頻りに渠を信用して善様々々と親み、折々駕を枉げて店へもヒヨコリとやつて來る事あり、然れども中澤は素封の大盡にして安田は出來星の錢兩替屋なり、此方から尋ねる時はいつでも臺所から入つて、板の間へ手を支いて而して執奏をお覺に頼まざるべからず、白駒十年安田は全速力を磨して身代を肥し、昔の大盡顔色なくして群巒富岳を仰げるの觀を爲す、而し

て安田驕らず益々舊好を温めて中澤を誘掖し、銀行會社の重役を授けて而して能く其面目を保たしむ、芙蓉天に朝して萬山位を得とても言はん哉。

大谷嘉兵衛毎朝の祈禱

人若し大谷嘉兵衛の居を訪はゞ、壁間忽ち光琳めいたるお龜の偏額かゝれるを見ん、問ふものあり曰く『之れ何の繪ぞ』と、嘉兵衛莞爾して答て曰く『之は和合の圖ぢや』と哄笑一番、宛も座興の戲談たるに異ならず、然れども渠は心の底から和合を願へるもの、試みに早朝耳を傾けて其居を窺へば渠は盥漱齋戒恭々しく天を拜して『世界泰平、國家安全、萬



國共利』と祈る、其聲凜然八字の髭を拂つて拍手の音バタ／＼遠く客堂までも聞ゆ。

### 鳩山和夫田原榮と一桁を争ふ

先年早稻田大學校友小會の借樂園に催さるゝや、談偶同人の年齢調に及んで、ツイに思はぬ老人を顯出するに至る、席上田原榮あり卓を對して鳩山和夫に謂て曰く『往時を追懷すれば僕が黃吻の大學生たるに當ては君は既に大學教授の先生であつた、思へば君の年齢は確に僕より一桁(十位)違つてゐるだらう』鳩山曰く『ナニそんな事があるものか、君の顔も大分面積が廣がつて、髪の毛に白穂が咲いたから、大概僕と似たものだ』

らう』と、論難攻撃數回に及んで愈々實地の調査を行へば、鳩山は五十才、田原は四十九才にして其差僅々二才のみ、鳩山威張つて叫んで曰く『ソレ見給へ二つしか違はない』田原透さず捻返して曰く『四十臺と五十臺では猶且一桁違ふぢやないか』

### 南條新六郎インキとペンキの失策

南條新六郎は上毛有數の事業家なり、明治六年實父岡谷瑳磨介(舊館林藩の執政)の遺志を繼いで軍人をやめて前垂掛の商人となり、士族の金祿公債を集めて大に殖産興業を企てたれども、由來腰刀と牙籌とは反が合はずして二一天作一刀兩斷の算術は未だ俄に掛引多端の實業を治むべ



からず、渠乃ち慨然として忍んで東京に出て、大藏省所屬の簿記講習所に入つて三十男の簿記生徒となる、教官 豫め言渡して曰く「教場用品中生徒の自辨に屬するものは種々あるが、差當りペンとインキを買つて來なくては不可ない」と、渠委細畏つて同窓笠原圓藏と共に買物に出かけたれども、二人が二人肝心買物の名を忘れて空しく日本橋界隈をキヨロ／＼し、忽ち西仲通にペンキの看板ぶら下れるを瞥見して絶叫して曰く「ア、之だ」と、急々其店へ飛込んだけれども尋ねる品物一向見當らずして、却て小僧の叱咤を喰ひ、這々逃出して向の紙屋へ立入つたれども、是亦要領を得ずして手代の冷笑す所となる、二人愈々面喰つて是非なく不用の半紙を買込み再び出直して纒に用辨するの滑稽を演じたり。

岩下清周矢野二郎に敬服す

北濱銀行頭取岩下清周の貧乏書生を以て築地の立教學校に在るや、偶々散歩に出かけて木挽町に商法講習所の看板ぶら下れるを瞥見し、こいつ一番冷弄呉れんと、ツカ／＼内へ入つてソラトボケて規則書一枚を要求す、奥にハイカラの一紳士あり清周を迎へて茶菓を進め、且つ説くに日本將來の商業を以てす、曰く「君もまだ年少だから實業家になつて働くがよろしい、そして閑があれば何時でも構はぬから遊びに來給へ」と、清周素よりそんな考も無く、又紳士の價值も知らざれば、唯々諾々と受流して好加減に逃去りたるが、翌日清周を立教學校に訪ひたる馬車紳士あ



り、小使驚ひて取次ぐに、清周また不思議に思て出て面會すれば是前日  
商法講習所て會つたるハイカラ紳士なり、ヤアとばかりに清周を馬車に  
打乗せ一鞭ピシリ加てホク／＼去つて其自邸へ伴ひ、散々御馳走して而  
して懇々當世の急務を説く、清周こゝに於て漸く紳士の親切なるに服し、  
其名を問ふて始めて彼の矢野二郎たるを知り愈々其好意に感じて終に商  
法講習所へ入る。

### 前島密煉瓦の建物に吃驚す

前島密は明治昭代の先覺者なり、初め海外視察の重荷を負ふて桑港に  
着するや、豫定のグランドホテルへ泊つて劈頭に其建物の雄大なるに膽

を潰し、仔細に館内を見物しては又其構造の綿密なるに吃驚す、感服し  
て曰く、「嗚呼此千疊敷は大黒柱も框もなく、しかも能く數萬の木片を集  
めて巧みて築造されてゐる、我朝の飛彈の匠若し見たならば必らず愧死  
するであらう」と、蓋し密は未だ煉瓦の何物たるを知らざる東洋の赤毛  
布のみ。煉瓦を目して數萬の木片となす亦強ち咎むべきにも非ず、傍に  
日本最負のロード、ハリソン在り、聞て而して奇貨誨ゆべしとなし、密  
を拉へて之に謂つて「善哉々々、君若し其目を一轉せば容易に米國の富  
強を解すべし、抑米國は箇々獨立の民を結んで此強大を致す、恰もホテ  
ルの建築に異ならず、其合衆國と稱する謂れ君未だお氣が付かれずや」と、  
密愈々其明教に感服して、却て煉瓦の煉瓦たるに氣付かざるもの數月。



喜谷市郎右衛門琵琶法師に泣さる

實母散本舗の喜谷市郎右衛門其病没前華族會館に開ける一新年會に臨んで、一琵琶法師の筑前琵琶を聴く、其初ペロン／＼と糸を拂つて不思議の音聲を發するや、市郎右衛門内々齒を浮かして宛も眞平御免と冷遇するものゝ如し、既にして法師は金切聲を振り絞つて伊藤少佐が戦死と愛馬漣の一段を語り、語つて少佐が愛馬漣を沙河の前線に乘棄て、奮進部下を勵して名譽の戦死を遂げたる所より「愛馬は故主を慕ひつゝ、轡を放れて朱なす骸に縋り付き、顔を摺付け襟を引き、いと悲し氣に嘶きて、君起き玉へ我負はんと、物言ふ事は叶はねど、天晴忠義を顯はして、

扶けも退かん風情なり、滿眼凄愴鬼神壯烈に泣いて征士衣を濕す」と云ふに至つて、今まで冷々たる渠俄に感に打れてポロ／＼熱い／＼涙を溢す。

朝吹英二丸二さんの名あり

朝吹英二の大分縣より京に出づるや、初め窮困して學資意の如くならず、是を以て衣服は常に柳原の古手を用ゐ、其社會に出づるに及んでも暫く此を墨守して以て好箇の紀念となす、一日友人莊田平五郎を某樓に訪ふ、樓の女將竊に以爲く、是れは必定壯士の來つて莊田の御前を強請る者ならん、先づ／＼體よく追ひ拂ふに若かずと、乃ち僞つて莊田の在らざる



を答ふれども英二は聞かず、ツカ／＼上り込んで莊田の上席に着き酒を召  
び妓を命じて傍人無きが如し、女將等驚いて莊田を拉して、窃にその何  
人たるを問へども、莊田は微笑して何の答もなし、こゝに於て女將等餘  
儀なく英二を呼んで丸二さんと云ふ、蓋し此時英二の衣服に丸二の紋附  
きたるに由れり、而して其の紋渠が定紋に非ずして例の柳原式出来合な  
るぞおかし。

### 朝吹英二頭陀袋を掛けて鐘紡をひく

鐘淵紡績會社の一回非運に接するや、中上川彦次郎特に敏腕朝吹英二  
を撰んで之が挽回を圖らしむ、英二會社へ入つて親しく細大を視察する  
に、日常運搬する所の綿花は紛々櫃に溢れて散つて落花の狼籍たるに異  
らず、渠乃ち案を拍つて成程と感服し、直ちに數百の頭陀袋を作つて之  
を全員に頒ち、自ら其一を首へかけて卒先見るに隨つて落ち散る綿を拾  
ひ衆をして之に倣はしむ、之より社運漸く恢復に向ふ。

### 田中源太郎の盆の牡丹餅

某年某月田中源太郎客を伴ふて京都の萬亭に遊ぶ、香風徐に來つて興未  
だ擧らず、田中杯を把つて客に屬し、仲居を顧みて命じて洛陽の花妓を  
聘せしむ、少焉あつて桃李庭に咲き頻伽梢に鳴く、其聲鳴々然として笑  
ふが如く泣くが如く、餘音嫋々として腋下を探るが如し、田中曰く「斯



うなつたら僕も一つ踊らうかい』と、乃ち衣を撮げて起つて今様を踊る、  
謠ふて曰く『盆の牡丹餅ちや三日置きや腐る、お鼻これ見や毛が生へた』  
と、音吐嬌艶、手振滑脱、進退度に適ふて俳優も將に三舍を避けんとす、  
こゝに於て満堂の花妓舌を捲ひて其手並に恐入る。

### 川上善兵衛の篤志

日本第一の葡萄酒を有して菊水葡萄酒の譽を博せるは越後の篤志家川上  
善兵衛なり、渠は昔其業に忠實なるのみならず、人に對して亦頗る親切  
なり、日露戦端を開き兵士の徴されて郷關を出づるあるや、渠は身を提  
さげて其歡送に奔走し、遺族の困窮するものあれば直ちに米錢を貢ぎて、

勇士をして内顧の憂なからしむ、渠親戚平松子爵(時厚)を訪ふて席隅一  
箇の蓄音器の有るを發見す、請ふて曰く『之は好いものを見付けた、暫  
らく拜借する』と、自ら脊負つて歸つて、郷里の軍人遺族を招き、之を  
運轉して以て彼等が積日の憂さを慰さめたり、聞く者爲めに嘆賞す。

### 三井養之助英語演説に窮す

萬里遠來の客を迎へて懇遇至らざるなきは英米紳士の美俗なり、往年三  
井養之助の英國に赴くや、倫敦の縉紳爲めに清宴を開ひて盛に渠を饗す、  
養之助は日本商人のお大名様なり、執事通辯常に四邊を圍繞て親ら庶事  
に接せざれども、お禮の演説は主賓の義理なり、此夜は一番起たざるべ



からざるの災難に際會す、こゝに於て渠は頭痛鉢巻、俄に三井物産支店の某通を頼んで當夜の演説草稿を綴らしめ、熟讀數遍之を暗誦して以て漸く宴に臨む、見渡せば英國の縉紳淑女綺羅星の如く席に連つて膽先づ潰る、然れども時機は早くも渠を促せり、左顧右盼胸を動悸つかせて渠は起てり、演説は紳士淑女諸君！の例語に依て喝采場裡に端を開かれぬ、満堂の群星は目を光らせて日本大紳士の鶴鳴を俟ちぬ、而して渠は此盛觀に打たれて却て肝心の記憶を失へり、苦々悶々卓を撫て椅子をいぢり、手を拱し頭を搔いて千思萬考すれども而かもまた何等得る所なく、百計既に盡きて渠は俄に窮鼠の勇を奮へり、曰く『余皆忘却焉』と、群星啞然、渠は赧然。

片岡直温田舎藝妓を煽動す

片岡直温事に因て勢州山田の一茶亭に登る、座に侍る藝妓數人、絃止み瓶子倒れて喃々樂屋を談ず、曰く『鶴原定吉はんや、片岡(直輝)はんが來やはれた時、大坂へ來い、來れば芝居を觀せて御馳走してやる、と言やはつたが、誠實やるふか』と、直温聞て而して奇貨弄すべしとなし、忽ち之を煽動してお負けに旅費若干を與へ、以て其襲撃を促す、妓等乃ち心を決して翌日大阪に赴き北濱花外樓に陣取つて、策を構へて時の市長鶴原定吉等を招く、然れども流石は敏捷の鶴原なり、適切それと察して不在を装つて巧く外せど、直輝獨り正直に出かけて終に藝妓の包圍す



る所となる「アツしまつた」と窃に悔れども終に及ばず、餘議なく二三酒友の應援を頼んで、田舎藝妓を引廻し、散々驕られせられて哀れ袋を脊負はされたり、直温後にしらばくれて兄直輝に謂つて曰く「過日はえらい御愉快で」と、而して直輝未だ其煽動者ありしを知らず。

### 諸戸清六花崗石を庭に敷く

故諸戸清六平素の儉約にも似合はず、立派な花崗石を庭に敷き詰めて得々其壯麗を誇る、人あり詰つて曰く「足下儉にして居常一錢の錢だも浪費せず、而して花崗石の贅は恐らく大名も及ばざらん、何ぞそれ矛盾の甚しきや」と、清六叱して曰く「庭に草が生れば人夫を雇つて除らせぬ

ばならぬ、始めに氣張つて花崗石を敷けば壯麗無比にしてまた除草奴を要せず。」

### 内藤久寛紐育の理髪に吃驚す



日本石油會社長内藤久寛米國石油業を視察して之て紐育に到り、長途の垢を拂はんと欲して先づ一理髪床に入る、椅子に凭れば芳香馥郁鼻を穿つて俗魂蝶と化つて飛ぶ、剃刀頬に當つてはスー／＼焉として舐むるが如く、鬼髭バリ付かずしては軟風緑を吹いて轉睡を催す、眞に是れ大國文明の理髪師、練達の技、銳利の刀、觸



接の快恰も酔ふて美人の介抱を受くるが如し、理し終つて久寛却て其速なるを憾む、快哉三呼佇立數分、扱料錢幾ばくと問へば、ボーイ表を示して金五圓(二弗半)を請求す、こゝに於て久寛吃驚自ら目のくり玉の反覆へるを覺えず、澁々金を拂つて「ア、懐中の痛い剃刀だ。」

### 左右田金作の秘寶

赤脚巨萬の富を致して左右田銀行を押ツ立てたる横濱の左右田金作は上州出身の一好漢なり、聞く渠に秘藏の珍寶ありと、金剛石歟、黄金佛歟、聞く者窃に其高價物件ならんことを想ひたるに、何ぞ圖らん之れは是れ一箇の古行李及一冊の手帳ならんとは、而して其秘寶の縁起に曰く「此

處に安置し奉る古行李は勿體なくも主人金作が丁稚以前に財産を貯へ、虱と共に中仙道を携帶したる旅行李にして、手帳は其時の小遣帳なり」と、百文の旅籠、十六文の草鞋、當年艱難を分ちたるの伴侶は歴々其影を止めて皆此手帳に在り、金作時々此二寶を飾つて昔の苦難を語り、堂々たる左右田銀行頭取の坊ちやま、嬢さまに示して奢侈禁厭の咒咀となす。

### 大隈伯壽命のくりのふ

早稻田大學第二期發展の大計劃をなして奮つて之に従事するや、事天聽に達し特旨を以て金三萬圓を下賜せらる、こゝに於て同校幹部は日をトして恭しく感謝の典を上野の精養軒に擧ぐ、大隈伯爵感奮自ら禁ぜず



して起て拜謝して曰く『聖慮夫れ此の如く優渥なり、重信百二十五歳の  
定命を今十年や二十年繰延へても誓つて此計劃を成功せざるべからず』  
と、満場爲めに奮躍す。

### 矢野二郎流石に吃驚す



故矢野二郎は磊落呑氣、晴天落雷霹靂耳を聳するも  
一向平氣の人物なり、一日朝飯を喫するに當つて、  
下婢の倉皇來り訴ふるものあるに會す、曰く『只今數  
名の亂暴者が闖入して御門を毀しにかゝりました』  
と、二郎不思議に思ふて小首を傾けて曰く『予はそ

んな恨を受ける覚えはない、何かの間違ひだらうから、もう一度確かめ  
て來い』言未だ終らざるに奴婢踵を接して變を報ず、二郎乃ち窓を排し  
て之を覗へば、何さま數名の人夫は扉を毀し腐れかゝりし柱を抜ひて門  
をばカラ／＼と撞と倒したり、之はしたり亂暴な奴もあればあるものと、  
眸を凝らして見てあれば、人夫は更に新材を荷ひ來つて柱を植て扉を取  
附けて瞬間に立派な門を新調し、四邊を掃除して悠々將に引取らんとす  
るものゝ如し、二郎不審に堪へずして書生を遣はして事由を問はしむれ  
ば、人夫は『或る方より前金で頼まれたのですから御心配なさるな』と  
答へ、終に其依頼者を告げずして去る、蓋し是れ二郎を徳とするもの、  
門の破れて見苦しさを厭ひ、工人に命じて來つて之を改造せしめたるな



らんも、末世に見難き此義舉には流石の二郎も一驚を吃して殆んど處置に苦しみたりと云ふ。

### 高田早苗お世辭を言損ふ

前島密一日高田早苗に向て曰く「ドーも近頃弱つた様だ」と、早苗笑つてお世辭をふりまひて曰く「ナニニ八十歳までは大丈夫です」と、密喜ばずして默然たるもの久し、早苗忽ち心付いて退いて人に語つて曰く「大失敗、古稀の上を十年も生延ると言つたら安心するだらうと思つたが、能く考へてみれば岳父は今年七十六だから八十歳では餘す所僅に四年で何さま心細く思つたに相違なす。」

### 砂川雄峻女湯へ飛込む



大阪第一流の辯護士砂川雄峻は又大阪一流の近眼なり、一日市中を散策して汗水流して入浴の必要を感じ、銭湯を探して漸う蘇生の思ひをなす、偶々盛夏日中に屬して風呂番番臺に睡り、槽中間として恰も人なきに似たり、雄峻仕合よしと衣帶を解きて浴場に飛び出せば、槽前忽ち驚愕の聲あつて

「貴君マアあほらしい、こゝは女風呂とす」と云ふ、雄峻面喰つて這々男湯へ逃げ出す。



金子堅太郎美人を泣かしむ

人の心より強きはなし、之を脅すに刃を以てすれども屈せず、人の心より弱きはなし、之を動すに義を以てすれば泣く、米人元と剛毅、義膽又大にして數々人の難んずる所を爲す、日露兵を執つて相見ゆるや、米人義に依て日本に同情し、紐育の貴夫人連中又恤兵寄附金を募らんと欲して活動寫眞の大會を催し、珍客金子堅太郎を迎へて爲めに一場の演説を求む、金子乃ち快諾して之に趣き、満堂諸嬢の高義を謝して謹んで本夕登壇の要旨を演ぶ、且つ曰く

日本天皇陛下は寶祚を祖宗に承け給ひて神文神武、徳教四海に溢れて

武威能く八荒に及ぶ、其位に臨ませ給ふや至仁至義内には蒼生を憐み外には友邦を重んず、強露約を反きて一旦満清の地を略するや、天皇義、親ら禁ずる能はずして、征露の大勳を進め給ふ、貔貅百萬決死命に趨きて水火も避けず、或は孤帆敵兵俯瞰の塞下に馳せ、或は赤手永久防禦の敵陣に攀づ、船沈み兵斃れ肉飛び骨砕け、忠魂煙と化して流血簡に印す、後援四千有餘萬、極力征士を勵して形影相應ず、兵の出發するに當つてや妻は老を扶け幼を負ひて之を路に送る、嘸して曰へらく「一家は憂ふるに足らず、郎乞ふ心を安して皇恩に報ひよ、妾在り、豈夫れ老幼を餓死せしめんや」と、父母は又曰く「勇進敵に趨て花々しく死せよ、卑怯事を誤つて斷じて祖先の名を汚す勿れ」と、而



して兵の之に答ふるものは曰く「臣民の生命は 天皇陛下の賜恩なり、  
軍人軍に死するは恩賜を奉還すると何ぞ擇ばん、一死素より鴻毛より  
も輕し、奮戦力盡きて吾先づ斃れんか、我血は以て 陛下の軍旗を彩  
るべく、我骨は以て皇國の礎を固むべし、父よ母よ又妻よ、心を強う  
して皇軍の凱歌を待て、百萬の貔貅遮莫皆軍に斃るゝも、七生人間、  
魂は軍旗を回つて誓つて無道の勁敵を滅さん」と其意氣此の如し、日  
軍の寒暑に暴して百戰百勝の功を收むる亦宜ならずや、近く東京の所  
報を閱するに畏多くも我叡世仁慈なる 天皇陛下は夙夜出征兵士の艱  
苦を憫ばせられて嚴冬宮中の煖爐を廢させ給ひぬと、不肖讀んで恐懼  
錯く能はず、感極まつて覺えず聲を揚げて泣く。

と、魄たる渠の音調は其深沈なる態度に合ひて一言一句皆惟れ肺肝より  
出てざるはなし、満堂肅々美人皆感に打たれて敢て仰ぎ見るものなく巾  
端涙落ちて歔歔の音に和す。

樺山愛輔誤て年増に怒らる

樺山愛輔靜岡に遊んで興津の濱に遊漁す、漁船數隻波を割つて鮮鱗若干  
を獲、之を苞にして送つて靜岡停車場に至る、愛輔待合に入つて只見れ  
ば、前に小意氣な年増あつて立つ、乃ち見送る漁師の御馳走がてらに戯  
れて問ふて曰く「お前は彼の漁師のお女房かえ」と、年増忽ち目眚を釣  
上げて怒つてその無禮を責め、口角沫を飛ばしてしたゝか痰呵を切る、



漁師恐れをなして窃に告げて曰へらく『彼女は大變當地の俠客の女房です』と、愛輔これや堪らぬと早々起て上等車に逃込む。

### 渡邊又兵衛名譽の遺言

故渡邊又兵衛は都下一錢湯の主人より身を興して一世の分限者となる、其勤儉忍耐は故人沼間守一の深く嘆賞せし所、夫の「親友と雖も信用貸は一切御断申候」の客間の張札の如きは最も彼の性格を標榜せしものなれども、しかも彼は單に積財守錢を以て目的とせしものに非ず、彼胃癩を煩うや自ら起つ能はざるを知つて平素親善する所の友人尾崎行雄、肥塚龍、淺香克孝等を枕頭に招き、數萬金を出だして早稻田大學を始め慈

善事業等に寄附せん事を托す、世人傳へて昭代の美談となす。

### 有島武車上明教を授く

有島武一日事を以て横濱に赴かんと欲し、新橋停車場に到りて一等乗車券を買ふ、會安田善次郎また横濱に事あつてこゝに落合つて道連となる曰く『私はいつも二等へ乗るのですが、今日は一等をおつきあひ申しませう』と、終に一等乗車券を買つて同乗談話して行く、神奈川驛を過ぐるに及んで、安田長嘆して謂つて言へらく『ヤレ、今日は高いお話を承りました』と、有島怪んで而して其差の僅々二十錢許なるを悟り、以て窃に安田の吝嗇なるを笑ふ、安田乃ち色を正して曰く『イヤ二十錢



ではない……二千圓程に當ります」と、有島乃ち拜謝して去つて人に告げて曰く「私は今日二千圓の明教を受けた」と、思ふに一錢日歩は二千圓に對して二十錢なり、安田は之を以て諷し有島は之を以て覺る、嗚呼また趣味ありと謂つべし。

### 來栖壯兵衛田中茂皮肉の競争

横濱の實業家來栖壯兵衛と田中茂とは皮肉家の兩關たり、共に商業會議所議員として往々奇矯の警句を弄し、大谷嘉兵衛の洒落と相待て一異彩を放つ、田中一日來栖を評して曰く彼れの皮肉なると其れ肥柄杓に類するなき乎と、來栖透さず横鎗を入れて曰く、僕が肥柄杓ならば貴公は即

ち其柄なきものなりと、蓋し其意手も附けられぬと云ふに在り、一同手を拍つて皮肉の深刻なるを絶笑す。

### 澁澤榮一の初夢

澁澤榮一少時父を助けて農業に従事し、肥料の買入と出かけて關宿商人北村某の家に一泊す、年は惟れ安政戊午、日は惟れ正月二日、家は惟れ肥料の開山岩出惣兵衛の實家にして、初買初賣の荷客は來往織るが如く、出船入船表梶裏梶の聲またチヤガドンたる事さながら音樂に異ならず、榮一草鞋を脱いで緩々御馳走に與り、寢に就ひてつくづく富豪の羨むべきを怨む、嘆じて曰く「嗚呼乃公もどうか此位の身代になりたいもんだ」



と、一老翁あり卒然枕を蹴つて一喝して曰く『小僧落膽する勿れ、汝の運勢は西に向ひて發展せん』と、榮一驚ひて起きかへれば、老翁現に消へて、始めて南柯の一夢たるを知る、以爲く、初夢は以て其身の一年をトふべしと、翌旦早々同家を辭すれば、郷黨渠を迎へて珍客鮫島雲城の來れるを告ぐ、鮫島雲城とは中井弘が世を忍ぶ假の名なり、榮一之に因て天下の形勢を解し、終に意を決して東京に上り、以て今日の渠たるに至る。

廣部清兵衛訴訟を好まず

勤儉力行麥酒の空壕も見遁さざるもの、之を廣部清兵衛となす、渠は日

本人中の小男なれども、しかも大腹米人を呑んで大に廣部銀行の隆盛を致す、顧問に小木會義房なるものあり不渡手形の事に因て頻りに訴訟の必要を説く、清兵衛温言以て之を誠めて曰く『足下は職責として爾言はれるのでせうが、不渡手形を受取つたは結局此方の不注意なのです、禍を未然に防ぐが策の上策ですから、訴訟提起は私不同意です』と、義房恐縮して退ひて人に語つて曰く『廣部さんは軀軀は小さくても全く頭取の器です、斯ういふ人が澤山出来れば日本も米國の様に富みます。』

松浦玉圃客を窘む

松浦玉圃は神田小川町の時計屋なり、氣骨拔群、書生を愛して已に六百



七十餘生の證人となる、一日店頭客あつて懷中時計の立派なるを尋ね、是れ兄なる一紳、弟なる一生に與へんとするもの弟をして、散々撰らばしめて以て結句代金三十圓なるものを購求す、玉圃瞥見して喝して曰く『其時計なら書生には過分てゐる、兄君が持つのだと思つたら…：篋棒な』二客色を變じて怒髮帽を刺す、玉圃乃ち紙片を取つて狂歌一首を書す、その歌に曰く

樂を後にのこして苦しめよ

書生に金は身を破るもと

と、二客讀下して其訓誨に服し、高價の時計を返して僅々十圓のものに代ふ、俠腸玉圃の如きは滅多に得難いと謂つべし。

堀越善重郎は求婚廣告の卒先者なり



求婚廣告は近時の流行物なり、新聞の紹介欄は日として之を掲載せざるはなし、日本は東洋の禮儀國なり、由來結婚を重んじて稱して人事の大禮となす、紳士の將さに婚せんとするや、紹介あり、近所聞あり、戸籍調あり、親類調あり、見合あり、媒妁人あり、結納交換あつて然して後華燭の典に及ぶ、其重々しい事概ね此の如し、堀越善重郎は我國有數の紳商なり、曾て月俸三百圓を受けてメーゾン商會に聘さるゝや、窃に國風結婚の面到臭きを厭つて卒先以て求婚



廣告をなす、曰く『月收三百圓、身體強健、年齢二十才前後にして、相當の教育ある新婦を求む』と、見るもの其突飛に驚ひて以て一箇の狂人となせり、前田正名の曰く『こいつ却々面白い男だ、他はどういふても構はん乃公が一番會ふてみやう』と、早速メーソン商會に渠を尋ねて、大に其秀才なるに感じ、終に己れの姪なにかしを妻せて日本一の花婿となす。

### 浅田正文博士號を褫奪らる

浅田正文は茶道潜心の洒落漢なり、食味に於て明治隨一の通人と稱せられ、同人尊重して私に食物博士の榮稱を上つる。一日元の天狗會の食通

相議つて珍食會を三井八郎次郎の邸に開き、珍妙不思議、見ても食つても爲體の分らぬ料理を供して以て大に來賓の批評を求む、正文素より上客たり、一咳して澄して曰く『此向は鯉魚です、斯う調理してあつては一寸分りませんナ』と、因て頻りに食道の通を振廻はす、一同乃ち恐入つて亭主役の宗匠川部宗無を顧みて其實際を問ふ、宗無は流石に粹客なり、正文を憚つて明地に答をなさず、曰く『ヤ之は當家の御主人がお心入の御馳走で、態々江州から取寄せられたのでござります』と、蓋し宗無は正文の凹まんことを恐れて暗裏に其源五郎鮎たるを示せるなり、會散じて天狗連は鞍馬會議を開き、終に正文の食物博士を褫奪る事に決す。



鹽田三郎海綿と見誤らる



痘痕班々輕石三舍を避けんとするは故鹽田三郎の顔色  
なり、明治六年渠の岩倉大使に隨つて歐洲に赴くや、  
毎事書記官福地源一郎と商つて俱に之を理す、一  
日福地急用を帯びて三郎の旅館を訪ふに、三郎偶々浴  
室に在り、石鹼を海綿に附けてゴシク其面を洗ふ、  
福地無遠慮に浴室を覗いて鹽田々々と呼べば、三郎手を止め面を舉げて  
顧みてナンダと答ふ、其状さながら輕石の白和に似たり、人の悪い福地  
こゝに於て透さず一言を投げて曰く『一體何方が面だ』と、因て哄笑し

て急用後るゝもの正に五分。

大倉喜八郎安田善次郎の明教に感服す

大倉喜八郎商業を擴張して手代を滿清地方へ派すれば、前日の白鼠は往  
々化して溝鼠となるの怪異に際會す、以爲く是れ其土地々々の季候が人  
々の心を變動せしめるものならんと、一科新發見を氣取つて、得々然と  
して安田善次郎に談す、善次郎冷笑一番之に謂つて曰く『貴公知らぬか  
役者を詠んだ川柳に

江戸の馬田舎へ行けば殿になり

の秀吟あることを』と、喜八郎膝を打つてナール程と感服す。



渡邊嘉一細君に屬まざる

北越鐵道敷設せらるゝや新潟停車場設置に關して慘憺蒙激の競争あり、  
會社の重役は之を沼垂驛へ置かんと欲するに反し新潟市民は全然沼垂停  
車場を否認し、論難攻撃終に爆裂彈を投じて會社を襲へるの椿事を惹起  
し、社長渡邊嘉一の如きは數々其危険に遭遇す、嘉一に父あり切に心配  
して慰諭して曰く「鐵道事業は結構には相違ないが、何も命を賭けて行  
る程の事はあるまい」と、嘉一心動きて漸く將に其職を辭せんとす、細  
君乃ち色を正うして開き直つて直言して曰く「嚴父に御心配をかけては  
濟まぬから辭職せうとの思召は御道理千萬子としてさう無うてはならぬ

様にも存じますが、身を立て道を行ふが孝の終とやら、今お辭しになつ  
ては貴郎男が立ちますまい」と、嘉一こゝに於て斷然意を決して難關を  
切り抜く。

村井吉兵衛夫婦して逐出さる

村井吉兵衛清國蘇州の妓に浮れて可愛い細君を客舎の閨に怨ましむ、則  
ち後悔して何とか詫て其憤を解かんことを思ひ、上海に到るに及んで窃  
に細君を顧みて言つて曰く「外國へ來たら風俗探檢が一番大事や、風俗  
に暗ふて商賣したら何したとて損や、因て今宵は一つ汝と一所に上海の  
藝妓屋へ登ろかいな」と、乃ちお茶瓶附の行列を練つて狹斜の巷を徘徊



し、大きな藝妓屋を見付けて吉兵衛先づ入つて椅子を占むれば、群妓蝟集し來つて歡待して好い鳥が引つかゝつたとすものゝ如し、既にして少妓遽しく驅込んで告ぐるに一婦人の戸外にイむものあるを以てす、形勢一變今までチャホヤした群妓忽ち怫然として吉兵衛を睨み「此處は夫婦者の來る所ぢやありません、ドットとお返り〜」と、寄つてたかつて吉兵衛を表へ突出し、ピシヤリ戸を締めて異口同音に「宵の口からほん、とに縁喜の悪〜！」

村井弦齋は言行一致なり

樺山愛輔、川村純藏、樺山資英等當世紳士の一團一夕某所に會して澆季

の人心を嘆息す、甲は曰く「人心の萎靡せる今日より甚しきはあるまい、乙は曰く『然り、殊に會社内部の腐敗と來たら殆んど言ふに忍びない、朝令暮改、言行不一致どうして之で二十世紀の社會が構成さるだらう？』と、愛輔傍より絶叫して曰く『否とよ、僕の知人に言行一致の紳士あり、口之を説かんと欲すれば必ず先づ實驗踏査して以て其事の遺憾なきを期す、知らずや此紳士は有名なる食道樂の著者村井弦齋なる事を』と満堂案を拍つて成——る程と合點す。

松方幸次郎學士に宣言す

松方幸次郎は川崎造船所の専務取締役にして神戸鏘々の實業家なり、新



に大學の學士を聘すれば必らず之を並べて待遇上の宣言をなす、曰く「今日から差上る月給は諸君の人物がえらいからと云ふ譯ではない、實に諸君が小學より大學卒業までに費した資本の利息として、冥利の爲めに相當の給料と名づけて支拂ふのであります」と、言皮肉なれども亦以て時弊を矯正するに足れり。

### 志村源太郎ポン引に引掛る

日本勸業銀行副總裁志村源太郎往年紐育に遊んで友人を拉して一珈琲店に入る、一米人あり馴々しく話しかけて「私の親類は日本へ行つて居ます」と口を開き「それで私は大の日本最負です」と嬉しがらせ、最後に

「此奥に日本人俱樂部が設けてあるから貴公等も行らつしやい」と勧め込む、源太郎漸く其甘言に乗せられて、引かるゝまゝに奥へ通れば、室内薄暗うして球戯場あり、骨牌所ありキヨロ／＼眼の紅鬚今しも車坐になつて合戦方に酣なり、物騒な案内者は靜に座右の拳銃を弄つて「サア貴公等も一勝負おやんなさい」と誘導す、源太郎こゝに至つて始めて賭博場へ連込まれたるを悟り、骨牌も球戯も知らぬ」で楯切つて辛うして其所を逃げ出す。

### 川島忠之助白髮の辭

男爵澁澤榮一先年花節を卜して澁澤倉庫創立十年を祝し、朝野に檄して



一大園遊會を飛鳥山の邸に催す、來賓雲の如く集り燦爛花に映じて栩栩として胡蝶の如し、横濱正金銀行取締役川島忠之助童顔白髮の故を以て推されて來賓總代の詞を呈す、辭に曰く『滿場多々必ず僕より年長の紳士あらん、只僕髮白うして推されて總代の榮を荷ふ』と、群紳その愛嬌に浮かれて拍手急霰の如く、落花爲めに片々。

### 大隈伯土居通夫の義太夫に辟易す

大阪商業會議所會頭土居通夫は三十年來義太夫に凝り固まつて自ら攝津の大掾直門の麒麟兒と號し、先年大隈伯の夫人同道彼の地に赴かるゝや、通夫伯をば花屋の旅館に尋ねて太閤記十段目を語る、見來れば陪聽

は天野、高田、坪内の三博士を始め當今屈指の紳士等十數名にして法學士の田中隆三先づ居睡を始め、町田忠治は到頭堪へずその場を逃出す、大隈伯の曰く『土居君の義太夫は多年の御勉強だから無論苦勞人以上に相違あるまいが、何と褒めたら宜いか、其褒め言葉に困る』と。

### 小川鉞吉車夫に知己あり

大阪神戸は小川鉞吉が嘗て三菱に在て共同運輸會社と激戦せし時代の古戰場なり、渠久しく此地を去つて往年豪遊の態度は老成眞摯の君子と變じまた前日の渠にはあらざるなり、而して梅田停車場の一車夫渠が昔を知るものあり、鉞吉大阪へ出かけて其處へ下車れば件の車夫は毎でも腕



車に乗つけて眞暗三寶昔の傳にて馴染の料理屋へ挽き込む、錯吉苦笑して獨語すらく「彼奴のやりかたには閉口するが、昔の手並を知つて氣を利かす心算だらうから小言も言へない」

奈良原繁少者を愛するの辭

前の日本鐵道會社々長奈良原繁は人も知るオイドン鹿兒島の古兵にて老て益壯なるの風あり、渠や元と美少年を愛し、今は併せて美少女をも愛す、而して其少者を愛するの辭に曰く「薩州國分は上等蕘の産地なり、竊に古葉の手置を窺へば老圃は先づ青葉を廣げて古葉をその上に置き、復青葉を重ねて古葉を置く事幾十百層に及んで始めて永く保存せらるゝ

なり、人間も亦然り老者少者に交る頻繁なれば心身自と復活膏化して氣力は更に衰へず、是れ乃公が年少男女を愛して勉めて之に近接する所以なり」と、聽者ナール程と感服す。

村井吉兵衛花瓶に崇らる

村井吉兵衛先年上海に遊んで陶器や磁器の古色蒼然たるものあるに垂涎し、危く似而非物花瓶を背負込まんとして、辛くも同行識者の救援する所となる、歸朝後渠また京都で銘物業平東下りの陶器を發見して竊に以爲く乃分はその實陶器の鑑識に欠くる所あり、不若何とか條件を附けて似而非物豫防の方法を講じ置かんにとはと、乃ち贗物だつたら二割を引く



べしと約して盲目滅法大杖一千圓を投じて之を購入す、幾くもなく吉兵衛其賈物たるを知つて約を履んで割引を嚴談すれども賣主は現金を出し惜みて苦んで大凡二割引に相當するの花瓶を押付けしが、何ぞ圖らん其花瓶は道具屋が北京で渠と同行して三百五十圓で買入れたるものならんとは、聞者相傳へて吉兵衛花瓶に崇らるとなす。

### 大越成徳坂谷芳郎を擲擄す

前藏相坂谷芳郎歐米漫遊の送別會を經濟學協會に開く、大越成徳此時起つて一辭を嘘して且つ曰く『行けや君、行ひて而して歐米各國の狀況を見られよ、天下廣しと雖も鹽專賣の行はるゝは埃及、支那及び我が日本

の三國あるに過ぎず、專賣又專賣、此行君益々專賣の利を見出して歸つて而して藝妓の專賣でもなさば成徳老ひたりと雖も亦能く局長位は勤めん哉』と、諧謔一番皮肉の眈を廻して満場を賑はす。

### 井上準之助感冒の神を惑はす

横濱正金銀行副頭取井上準之助童顏稚氣を帯びて壯腕老功を凌ぐ、先年渠の兒お多福感冒に罹るものあり、醫者戒めて曰く『此感冒大人に感染らざるも小兒に於て頗る親み易し、君乞ふ速に豫防せよ』と、渠乃ち命じて病兒の姉妹を隔離し以て大に安心なりと爲せども、しかも感冒の神





尙ほ未だ去らず、家中暴れ探して大きな小兒を捕へたりと喜び、終に戸惑して家嚴の準之助に取付く、醫師笑つて曰く大人のお多福感冒は實に近來の珍事なりと。

### 中野武營謡曲の今昔

中野武營謡曲を以て同人の間に知られ、稱して旦那藝の親玉となす、然れども其初め稽古するに當つてや音聲皺枯れて且つ顛へ、師匠も首を捻つて屢々匙を投げんとす、而して武營豪邁毫も屈せずして遂に今日の成功を見る、先年早稻田實業學校卒業の典を擧げ武營も亦招れて賓席に在り、大隈伯間に乗じて武營に揶揄つて曰く『紳士謡曲を謡へば必ず君の巧妙

を稱す、私も二十年前雉子橋の宅で君の俊寛を聴かされる光榮を荷ふたが、随分骨が折れて今でも忘れられぬ……名人の俊寛は彼の皺枯れ聲で聞えない様に謠ふものか知らんと、武營之には閉口して少々鼻が曲る。

### 馬越恭平三きの謂れ

馬越恭平居常後進を誨へて曰く『心は快活ならんことを欲し禮は叮嚀ならんことを要す、男兒の世に處する須らく事物に心配すべく斷じて心痛すべからず、若夫れ禮に至つては脱帽失敬凡て禁物、宜く平身低頭指靴に達して而して已まざるべからず』又曰く『人間三き無かるべからず、



余常われつねに此このきを愛あいすと、聽きく者もの其そのきの何なにたるを解かいせず問とふて而しかして實じつを得えたり、曰いはく正しやうぢき、沈おちつき、元げんき！

### 朝吹英二福澤先生を刺さんとす



朝吹英二初はじめ攘夷じやういの論ろんに與くみして福澤先生ふくざはせんせいのハイカラ説せつを惡にくむ、明治三年英二へいじの出いでて大坂おほさかの醫藤本某いふぢもとぼうの三さん一びんとなるや先生せんせい數々某むくぼうと往來わうらいして牛肉ぎゅうにくを食くらひバタを舐ねつて以もつて益々ますます英二へいじを厭いやがらす、一日いちにち先生英二せんせいへいじを伴ともなふて緒方せうかた洪庵こうあんを尋ね夜よに及およんで而しかして歸かへる、英二へいじ竊ひそかに以もつて爲なる國賊こくぞくを殪たふすの時とき機き至いたれりと、將まさに刀たうを抜ぬひて背後うしろより先生せんせいを刺さ

さんとす、ドロく／＼ドロ芝居しばゐ忽たちまち近所きんじよにハ子こて英二へいじ度膽どきもを抜ぬかれ、空むしく先生せんせいを討うち洩もらして已やむ、其後そののち英二へいじ先生せんせいに面めんして猛然まうぜんとして洋學やうがくの非ひなるを論ろんじ既すでに激げきして先生せんせいを刺ささんとするの始末しまつを語かたる、先生せんせい憮然ぶぜんとして英二へいじの不學ふがくを憐あはれ世界せかいの大勢たいせいを説とひて懇々こんくその不ふ了簡れうけんを諭さとす、英二へいじこゝに於おいて迷夢めいむ始はじめて覺さめ、翻然はんぜん心を改あらためて先生せんせいの門もんに學まなぶ、先年せんねん慶けい應おう義塾ぎじく同窓會どうそうかいの大坂おほさかに催もはさるゝや英二へいじまた臨のぞんで一場いちぢやうの懷舊談わいきやうだんをなし、涕泣ていきふ其罪そのつみを懺悔ざんげして謹つしんで先生せんせいの靈れいを祭まつると。

### 澁澤榮一ブルナの辨

澁澤榮一しぶさけい先年せんねん日本女子大學にっぽんじよだいがくの卒業式そつげふしきに招まねかれ成瀬校長なるせかうちやうえんせつ演説のちの後に立たつて



滔々普婁那の辨を振ひ、劈頭「私は學者でないから成瀬さんの様な理想を現實にするとか何とか立派な演説は出来ませぬが……」と前提し、更に洒脱の語を進めて「それで私の皆様にお願するのはブルナ……ラシクセヨと云ふ事で女ふるな、女學生ふるな即ち女らしく女學生らしくして實用的の婦人に爲つて下さいと云ふのです」と、言簡にして肯綮に中り、校長の理想演説と前後相映じて満堂割るゝばかりの喝采を博す。

### 井上辰九郎市川左團次を驚かす

横濱火災海上運送信用保険株式會社専務取締役法學博士土子金四郎先年日本興業銀行理事井上辰九郎と關西に旅行し、長途汽車の無聊に苦んで

井上得意の声色を使ふ、曰く、僕は一番左團次が旨いんだから君聽いて、側から批評して呉れ給へ」と、乃ち縮緬の咳拂して身を反らして左團次の外記を使へば土子一々評を下して頗るお師匠番を氣取る、既にして車隅一好漢の青眼鏡をかけて坐る者あり、不圖氣が付ひて凝視吃驚、それが即ち眞固の市川左團次ならんとは、二人閉口口を押へて大に悄氣かへる。

### 堀達碁客を凹ます

日本郵船會社文書課長堀達新弟を山水明眉の高輪臺に落して閑あれば友を招いて頻に烏鷺を闘はす、一日筑仙某なるものあり達より強きこと一



二三子、例に依て來つて達と對局す、初めは子を下す僅々、漸く樞紐を爲して接戦に入り、或は飛び或は尖み或は約し或は提し、千奇百出鼠となり虎と變じ魚となり龍と化して紛錯殆んど窮りなし、既にして策仙子を誤つて引ひて遠しく『待つた』と呼ぶ、達悠然機を得て而して問ふて曰く『乃て閣下は舊高何萬石？』と、策仙辟易士氣大に挫けて到頭勝つ碁を負けにす。

### 坪谷善四郎倫敦の玩具に失敗す

坪谷善四郎先年歐洲に遊んで倫敦に至る、以爲く紳士海を渡つて遠く遊ぶ宜しくその土地の土産なかるべからずと、因て市中を素見して手輕の

玩具數點を購ひ旅舎に歸つて獨語して曰く『流石に英國だけあつてこんなものまで巧く出來てる』と、頻りに眺めて吃驚ボール箱のペーパーに Made in Japan (日本出來) の文字あらんとは。

### 佐藤顯理ガタ馬車主義を説く

佐藤顯理商品陳列館長を辭してロイテル電報通信員となる客あり試に問ふて曰く『足下館長の椅子を去て瓢乎たる種取となる、果して如何の快樂ありや』と、顯理透さず答へて曰く『人間は精勵奮闘倒れて而して後已まんのみ、君見ずやガタクリ馬車は常に凸凹たる難路を走つて毫も挫折するなきを、人間も亦此の如し、精勵奮闘の報酬只毎夜熟睡の快樂あ



れば足れり」と、客首肯して去る。

### 伴野乙彌寶物を盗まる

日本興行銀行理事伴野乙彌一箇の鑰を得て大にその珍を喜び、出入相携へて到る所その奇を誇る、一日渠二三友人と築地の瓢屋に會して熾に鑰談を振り舞し、三更酒盡き座白けて將に歸らんとするや車夫遽しく來り泣訴して曰く「旦那大變腕車を盗まれました」と、藝妓等また氣の毒がつて弔詞を述ぶるも渠は平然また新調するからと落着く、少焉て渠忽ち顔色を變へて蹶起して曰く「サア大變、腕車は可いが中へ入れといた大事の鑰も一所に盗まれた哩」と、因て長太息して折角の酔も醒む。

### 馬越恭平洋行の三土産

馬越恭平歐米を漫遊して敬服するもの三あり、一に曰く碧眼老翁の奮闘二に曰く専心一業生涯の、三に曰く公德心の發達、此三のものは皆同胞邦人の龜鑑とするに足りて好箇の土産たらざるはなし、就中公徳發達の一事は渠の歎賞措く能はざる所にして、歸て而して人に語つて曰く「歐米の子供は路傍の花弁を折らず、田舎道の兩側に果物熟すれども行人ついぞ取つたる例なく、兒童毬を公園に弄んで誤つて芝生の中に落せば自身濫に柵を越へずして去つて警官に訴へ、謹んで毬の返還を請ふなどは如何にも美くしい、斯れてこそ始めて國富み民裕なるを得るのだ」と、因て願



みて邦人の不了簡なるを懸懸す。

### 石黒忠恵電話の信號

石黒忠恵の家にては電話を受ければ其れを聞き附けた者は必ず大聲オ  
ーイと答へて然して後電話室へ赴く、或人其滑稽に抱腹して故を問へば  
忠恵色を正しうして答て曰く「君等は經濟法を知らんから困る、電話が  
かゝつて鈴が鳴るとそれを聞き附けた者は誰でも駈付けるのだから、時  
に依ると一時に二三人も駈付けて無益に間を費す、乃て先づオーイと大  
聲で己が出るぞと信號してかゝるのだ、だから其オーイは送信者に報る  
オーイではなくて此方の徒勞を警戒するオーイなのだ」と、問ふ者恐入

つて其注意深さに服す。

### 岩下清周敵の參謀を生擒る

岩下清周一幅の名畫を取つて友人某に贈り心窃に其愛重せられんとを期  
す、後數日某怫然として清周を尋ね「折角の賜だが彼は贖物だから」と  
文句を並べて件の名畫を突戻す、清周意外の感をなして更に他の一幅を  
贈るも是れまた贖物の宛を免れずして空しく某の憤を招く、清周乃ち  
某の帷幄を牒して某書畫屋の參謀たることを知り、今度は一畫の怪氣な  
るものを某書畫屋から買つて之を某に贈れば、某果して喜ぶこと涯なく、  
貴重の眞筆となして以て恭しく之を受く、清周ペロリ舌を吐て獨語すら



く『人を射んと欲せは先づ馬を射よ……ナール程、戦争はこんなものか  
501』

### 朝比奈知泉會長の名あり

朝比奈知泉頃日知人数名と新橋花月樓に會飲す、一老妓あり座に侍して  
知泉を呼ぶに「會長」の名を以てす、滿座其故を知らずして知泉に問へど  
も知泉もまた知らずして之を老妓に問ふ、妓の曰く『貴客モウお忘れな  
すつたの』と、憶ひ起す今より數年前東都に暢氣俱樂部なるものあり、  
後藤新平、後藤猛太郎、杉山茂丸、大河内輝剛、矢代六郎、朝比奈知泉  
等一騎當千の豪傑相集つて頻に豪遊をなす、當時知泉豪放最も甚しく流

連荒亡歸るを忘れて自宅の不在に移轉したるを知らず、其暢氣さ加減俱  
樂部に冠たるの故を以て終に暢氣會長の榮名を博したるを、老妓復曰く  
『暢氣俱樂部の全盛をお忘れなすつちや不可ないと言ひたいんですが、  
…そこがソレ會長さんですわね』知泉ナール程と膝を拍て諄々當年の豪  
遊談をなす。

### 後藤新平友誼に厚し

前の臺灣民政長官祝辰已廉潔を以て家政振はず、病歿の後遺族殆んど其  
處置に苦しむ、官民其困難に同情して私に金を齎して之に贈らんと欲し、  
以て前長官後藤新平に商る、新平叱して曰く『汝が志は嘉すべきも行



爲は即ち故人を侮辱するもの』と、斷然之を排斥し、更に新平一己の友誼を以て金一萬圓を贈る、聞くもの渠が友誼を稱す。

### 渡邊亨巧に翻弄さる

渡邊亨營口水電株式會社專務取締役として暫く營口にあり、社務を帯びて上京し一夕友人數名と芝紅葉館に會飲す、女中頭おかな愛嬌たらく酌を取り秋波を亭に寄せて口を迂らして曰く『渡邊さまは營口の會社へお勤めの故か段々支那人に似てゐらしつたわ』と、享勃然として目を見張り開き直つて『之は怪しからん』と喰つてかゝれば、おかなニツコリ柳に受けて『支那の皇族によく似てゐらつしたのよ』享こゝに於て

色漸く和らぎ手もて頤を撫て、オホン。

### 益田克徳大槻文彦の香氣に驚く

文學博士大槻文彦曾て根岸沿革地圖の編纂に従事し、連日舊趾を搜索して毫も倦む所なし、偶々除夜に屬す渠手丸提燈を提て根岸將軍塚の所在を尋ねんと欲し、之いて益田克徳を下根岸に叩く、克徳方に迎陽に急にして雜務堆積すれども、文彦到ると聞て迎へて『何御用』と問ふ、文彦曰く『月迫つて嘸御用多だらうが一寸お尋ねしたい事があつて參つた、併し僕等のする事は君には解り憎からうと思ふから、前以てその難題と云ふ事を斷つて置く……』と、克徳大晦日の多忙に氣が氣でなければ、



大に焦つて『ナ、何の用かね、今時分にやつて來られて』文彦悠々閑々として微笑して曰く『さればサ、その用事と云ふのは將軍塚の所在だ、どうも探してみたが分りかねるから君に尋ねてみやうと思ふてよ……』  
克徳呆然一喝して曰く『ソナ事を知るものか』と、蹴起疊を蹴立て奥へ引込み、再び出會はずして年を越ゆ。

### 郷隆三郎洒落の材料に使はる

人あり一日品川白煉瓦會社専務取締役郷隆三郎を叩き立て論談數刻、終に雑話に移つて手輕に謂つて曰く『此頃獨逸から婦人科の名医が來て到處歓迎されてるとナ』隆三郎眞面目に之を駁して曰く『イヤ婦人科ぢやな

い細菌學の博士ぢや』その人微笑一番『それでもコツポ(子宮)博士と云ふぢやないか』

### 萩原源太郎襟飾を遣る

萩原源太郎澁澤榮一に隨ふて米國に赴き、紐育に留つて公私の用を辨ず。一日彼市に出て、買物をなさんと欲し、美髯美服日本紳士の模型は我なりと言はぬばかりに修飾立て大道狭しと濶歩したるに、忽ち襟を探りて襟飾のあらざるに心付きしまつたとばかり始めの氣色どこへやらにて、驚いて旅館に歸へれば、哀れ襟飾は卓上に留りて、聲無くて主人の粗忽を嗤ふが如し、源太郎嘆じて曰く『日本の大紳士も之では一向威張れな



「と、倉皇之を着けて狐鼠々々として出直す。」

### 五十嵐敬止啞の通辯を随へて洋行す



五十嵐敬止米國漫遊を企て、巧者の通辯を得んと欲す、以爲く、川口恭輔は何處までも西洋通の柄行なり彼を伴へば萬事に調法ならんと、乃ち之を随へて行く、萬里疾征龍蛇煙を吐ひて汽船金門に入り、桑港に上陸して旅舎を求めんとするに、杖とも磁石とも頼んだ恭輔洋語の啞にして又聾たること殆んど敬止よりも甚し、曰く「僕は洋語と來たらピーフテキとライスカレーの外何にも知らない」と、

敬止愕然其意外なるに驚け共また如何ともすべからず、終に啞の彌次喜多を氣取つて北米大陸を横行す。

### 末延道成禿頭を辯護す

末延道成一夕某會に臨んで談偶々禿頭のこと及び、道成襟を正して曰く「業は勉むるに成つて行ひは怠るに荒むと、夫れ黄金の茶釜も使用はざれば錆朽頓に發して復た用に立たず、然れども使用ふて減る部分と殖へる部分とは自から異にして例へば力士の力を使用うて筋肉充實するに反して觸覺は却て減却するに同じ、是を以て智を働かす者は腦漿増大變化益々微に入て鬼神も計り知る能はずと雖も、其外防に任ずる頭髮に



至りては却て早く枯却するを常となす、夫の獨のビスマークの如き、英の  
グラットストーンの如き、皆早くから禿頭と爲て大に蠻人の翠髮豊富な  
るに似ざるも其例證ならずや、惟ふに頭の禿げるは文明人に限る、』と、  
聞く者感服して願一願すれば白燈空に懸りて夫子の禿頭は更にビ、グよ  
りも光る。

### 安川繁成の磊懷謝物を公賣す

故安川繁成朝野に起伏して夙に正公侃諤の譽あり、豊山銀行迎へて之を  
頭取に仰ぎ、行務を一新して秋毫微塵も私する所なし、繁成の知人某な  
るものあり、擔保を提供して繁成に因て豊山銀行の金融を求む、貸借成

るに及んで某私に繁成を徳とし、其邸を叩きて別に謝金若干を贈らんと  
す、繁成叱して曰く『銀行は金融を以て商賣とす、擔保を提供して來る  
者は公々然なる表門のお客なり、何ぞ謝金手數料の邪利を貪らんや』と、  
怒つて之を斥くれば、某は悄悄として門を出て、更に縮緬一反を投込ん  
で去る、繁成乃ち之を携へて銀行に赴き行員を集めて具に其轉末を語り、  
且つ曰く『之は是れ余の私有すべきものに非ず』と、直ちに近隣の吳服  
屋を招ひて之を十二圓に賣却し、以て銀行雜收入の部に加へたり。

### 淺野總一郎古川市兵衛の元氣に驚く

東洋汽船の社長淺野總一郎嘗て大磯に遊び積日の勞を慰す、歸途鑛山王



故古川市兵衛と同車す、總一郎市兵衛に謂て曰く君は中々豪い、赤手にして富億兆を重ね、天下稀に見る所なり、僕も亦今後二十五年働かば或は君に及ばんかと、市兵衛笑て曰く二十五年は僕が今後正に爲すあらんとするの時のみ、前途春秋に富むの足下にして豈に僅々二十五年を期すべけんやと、總一郎聞て彼が元氣の絶大無限なるに驚く。

### 淺沼藤吉織田一等を驚かす

織田一龍居頼三の二人嘗て相携へて歐米漫遊の途に上る、寫眞機械商淺沼藤吉又道連となつて俱に供に歐洲に向ふ、船中相談すれば官吏と新聞記者と氣焔大に揚りて商人はさながら啞者の如くボーイ等また誤て主從

となすもの、如し、而して其上陸するや藤吉彼地寫眞機械商等お華主様たるの故を以て到處大持てにもて、巴里に伯林に旅館は皆三頭立の馬車を具へて盛に渠を送迎し織田龍居の兩人は却て從僕を以て目せらる、二人驚て嘆じて曰く『崇金國へ來ては我々往生、これて同じ割前を取られちや堪らぬ』と、終に別れて轉宿するに至る。

### 保坂潤治靴の右左を知らず

越後の豪農保坂潤治先年上京して縁戚牧口義矩に招かれ、新橋花月樓に登つて素的の御馳走に與る、前には名物の紅裙玉爵を侷め側には老練の亭主幹旋至らざるなくして、珍肴佳酒の三面攻撃に會ふ、こゝに於てか



流石の潤治孟爵に堪へずして踏々跟々酔を伴ふて玄關に敗走すれば紅裙左右に支へて「貴君マアお危険いお静に」と注意す、然れども潤治は「ナシノ生麥酒なんかに酔はされて堪るものか」の虚勢たらしく手づから靴を取つて穿かんと欲すれども調子狂つて足更に入らず、叱して曰く「車夫、これは靴が違つちよるぞ、乃公の靴を出せ………」と、罵喝相次で自ら「お前の靴は左右」なるを知らず、紅裙嬌舌を弄して曰く「貴君もとんだ少尉さんです、お靴は右左異つて居るてはありませんか」

### 矢野二郎の諧謔

矢野二郎は俠骨稜々として人に屈せず、時に或は熱罵嘲笑口を衝て出て

時に或は滑稽諧謔人を驚かす、嘗て横山孫一郎印度に赴かんとし、友人數十名新橋停車場へ送る、皆謂て曰く印度は氣候酷熱大に自愛せよと、二郎曰く「ナニ横山は故國へ歸るのぢや、心配するに及ばない」蓋し孫一郎顔色土の如く宛然印度人に近ければなり。

### 鹽田眞能く機智を弄す

鹽田眞、巴里及グラスゴの博覽會を巡察して歸途駐獨清國公使楊儒等と同船す、楊の曰く「足下は日本の博覽會博士とも言はれる御仁だからお話するが、どうも貴國の藝術家は近來不親切に爲つて困り切る、嘘と思ふなら能く御覽なさい、貴國から清國へ輸入するのは皆粗製濫造の價



値なきものばかりである』と、鹽田透さず答へて曰く『いかにも安物の  
みを輸出する様だが、之は畢竟貴國商人が金を惜んで安物々々と下等の  
注文ばかりするからです』と、楊儒復た語なし。

### 波多野承五郎美人に弄ばる

波多野承五郎益田の大師會に臨んで松笠焼の御馳走に酩酊し、黄昏辭し  
て品川停車場に至る、偶々洋装の三名の美人あり相携へて上等汽車に入  
る承五郎目眇を下げて窃に其跡を尾し、終に其車の隅に乗つて瞥見涎を  
垂す、以爲らく之は是れ富豪の令嬢必らず何處ぞの夜會へ趣くものなら  
んと、謹慎以て好物の卷蓑も遠慮し禮を固くして新橋に着す、下車せんと

欲して起て鬨を排すればピタリ脊を叩かれて『波多野さんお澄しね——』  
の嬌音耳に轟く、乃ちギョットして顧一顧すれば何ぞ圖らん美人は平生  
馴るゝ所のチヨマ吉ガロ八ニヤン子の三妓ならんとは、承五郎怒り且つ  
罵つて曰く『ナンダ此畜生他を烟止にしくさつて』三美口を揃へて曰く  
『オホ、道理で一どきにお頭から烟が出ますわ』

### 藤田傳三郎自ら書畫骨董の多きに驚く

藤田傳三郎書畫骨董を藏する事の多きは關西能く比ぶものなし、修理の  
爲めに毎年費す處二千五百金に下らず、彼曾て其藏する骨董の目録に代  
へ之が縮圖を作らしめんとし某畫工を招きて其事を謀る、某積算數回の



後九萬圓を以て之を便すべしと答ふ、流石の藤田も之には啞然苦笑して  
其事を止めたり。

### 有島武銃獵に窮す



有島武往時銃獵を好んで自ら斯界の驍將と誇る、一  
日鳥銃を擔ひて雉獵に出かけ、武總の山川を跋渉し  
たるも更に獲る所なくして日漸く西天に没す、武鼻  
凹み心焦ち腕瘦へ脚勞れて進退惟谷る、因て木の根  
に腰を掛けて愁然として用意の握飯を喰ふ、忽ちに  
して前林羽たゞきの音して一羽の雞罍を求むるを

見る、武屹と目を注げて曰く「まゝよ、之でも射つてやらう」と言下一  
發雞を殪して纔に溜飲を下げれば、飼主一方に黷はれて怒て其無法を  
詰る武閉口して謝するに雉と間違へたりと云ふを以てし漸く償金五十錢  
を出して亡ぐ。

### 大谷嘉兵衛公平の洒落

工業所有權保護協會主催となつて上野竹の臺陳列館に發明品博覽會を開  
かんと欲し、各新聞雜誌記者を華族會館に招きて披露の宴を張る、大谷  
嘉兵衛委員の一人を以て幹旋最も勗めたり、一客あり口角沫を飛ばして  
諄々望むに審査の公平ならんことを以てす、嘉兵衛温顔例の如く従容と



して應へて曰く「それぢやテ、其公平が最も困難……逆に讀めば平公  
(閉口)ぢやからネ」と、一座哄然客は啞然。

### 高木三郎空瓶を隠す

故高木三郎米國に留學して紐育の某婆が家に滞存す、婆の曰く「珍客志  
を立てゝ来る、妾豈敢て歓迎せざらんや」と、私に苦學を賞して以て感  
心な書生さんとなす、三郎こゝに於て大に勤慎を装ふて婆の甘心を買へ  
共、性來の左家一日も酒無くして已む能はず、三郎去る、婆名残を惜ん  
で停車場まで見送り、還つて三郎の部屋を閲して麥酒の空瓶五ダースを  
得たり、婆呆れて曰く「オヤ〜」

### 松尾五兵衛親族を電殺す



信州松本の紳商松尾五兵衛甲府に旅行して誤つて金側  
時計を紛失す、以爲く是れ途中で掏賊に盗られしか自  
宅へ遺れたるかの二途に過ぎざらんと、直ちに警察署  
へ訴へ同時に不在宅へ報知して搜索頗る力めたりしに、  
翌日手鞆を開けば、迷子の時計は鈔針的々として兒は  
無事焉に在りと訴ふるものゝ如し、五兵衛ヒヤヒヤと驚き且つ喜んで早速  
前日の訴を取消し、自宅に電報して俄に其搜索を中止せしむ、晴天落雷、  
五兵衛の家族等色を失ひ東奔西走最寄の親族を會して五兵衛甲府に頓死



したりと披露し、細君愛子の如きは目を泣き脹らし口を訥らして殆んど將に愁殺されんとす、既にして郵便甲府より着し五兵衛用辨して明日歸宅すべしと書す、こゝに於て親族二度吃驚り、さながら夢路を辿る心地して呆然爲す所を知らず、何ぞ圖らん之は是れ五兵衛が急電「トケイシレタ」の文字が偶々電信局にて「ゴヘイシンタ」と誤り譯されたらんとは、聞く者笑ふて以て五兵衛親族を電殺すとなす。

### 河東田經濟部下を戒む

富士製紙會社専務取締役河東田經濟清北海道の工場を視察して歸り、將に食せんと欲する際部下某誤つて指身の醬油を溢す、某直に机上の半切を

裂いて槍鼻之を拭ふ經濟色を作して大喝して謂へらく咄哉何爲者ぞ、巻紙の一尺敢て惜むに足らざれども、その品會社の公物たるを奈何せん、反古を探すなり、給仕に雑巾を命ずるなり、自ら其途あるべし、會社の物品を大切にせざる心は甚だ責めざる可からず、斯る心を以て會社の事務に従はるゝに於ては頗る懸念に堪へず」と、大に公物濫費の惡弊を痛戒す。

### 梅浦精一清水宜輝等月に笑はる

世に傳ふ廿六夜の月は不思議に三尊を具へて波間を出づと、清水宜輝外二名、陰曆七月廿六夜の當日梅浦精一に招かれ大磯の別墅に赴く、別



墅は驛の高丘に在り一望千里、俯しては碧玉の岩に砕けて煙の如くなるを見、仰ては遙に富岳の天空に聳ゆるを望む、水天髣髴氷輪未だ何れに孕めるを知らず、曰く『月の出は二時頃だと云ふから少し寝て待たうぢやないか』と、衆議一決、こゝに於て宗匠式守某を不寝番に頼んでトロくくとやらかす、既にして宗匠大喝して呼んで曰く『只今一時三十分です、未だ少々お早いが豫め御注意致します』と、精一宜輝驚て首を上げれば桂光霜を欺いて月波を出づる既に數尺、笑つて我を驚くものゝ如し。

高田慎藏悴の身代に立つ

高田慎藏故川村傳衛の二女を入れて一子邦三郎に配するや東京帝國ホテル

ルに紅燭の典を擧ぐ、内外朝野の縉紳淑女、苟も兩家に交際ある者、西より東より來つて此盛事に參す、四海波靜に風治つて新婚長に偕老を契り、式は目出度局を結びて、満堂洵として歡聲に酔ふ、座に割鐘先生豊川良平あり、左右を顧みて曰く『サア新婿どんを胴揚しろッ』星羅鱗立勇氣勃々の若縉何かは以て猶豫すべき『ソレ面白い』と争ひ起つて婿殿を捜すも夫婦は既にそこらに在らず、鴛鴦兩々新婚旅行と出かけて、流星光底長蛇は逸せり、良平憤躍一番『そんなら親父を胴揚しろッ』と、群縉終に慎藏に蟻附して手取り足取り宙に煽りて目出度々々々の若松様を歌ふ。



名士奇聞錄終

明治四十四年十一月二日印刷  
明治四十四年十一月七日發行

著作者

嬌 溢 生

發行者

增 田 義 一  
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者

佐 久 間 衡 治  
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

名士奇聞錄

不許複製

定價十五錢

發行所 株式會社 秀英舍

發行所

實業之日本社

東京市京橋區南紺屋町十二番地

大賣捌所

東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、上田屋、大阪盛文館、  
京都東枝律書房、名古屋川瀨書店、久留米菊竹金文堂

電話京橋八七四番八七五番  
郵便振替貯金口座三貳六番



笑 は 福

高須梅溪先生著 **滑稽趣味の研究** 再版 定價六十錢 郵稅六錢  
 人間萬事塞翁が馬、圓い卵も切り様の世の中人生五十年物は見様聞様で笑つて暮すことも出来る、本書は其の見様聞様の研究法だ。

郵稅貳錢封入 申越者へは **本社發行圖書目錄** を呈す

嬌溢生著 **獨笑珍話** 十版 定價四十錢 郵稅六錢  
 乙に濟した現代名士の滑稽談、一讀クツスリ、再讀ハツハハ、三讀腹を抱へ、四五讀涙を出して笑ふ珍々妙々の笑話

實業之日之本社

實業之日日本社發行圖書總目錄

●史傳地理

- 農法學博士新渡戸稻造君著序 山方香峯君著 **十大德教家傳** 大版 上製美本 正價貳圓 郵稅拾貳錢
- 若宮卯之助君著 **米國史** 大版 上製金文字入 正價壹圓七十錢 郵稅拾貳錢
- ルーズヴェルト原著法學士 遠山照君山崎梅處君共譯 **偉人クロムウエル** 大版 上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢
- 農法學博士新渡戸稻造君序 山方香峯君著 **新武士道** 大版 金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

岡 三慶翁著 **新編 武士道實話** 上製 金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

山方香峯君著 **一人近世人傑傳** 上製 金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

山方香峯君著 **世界人豪の片影** 中版 全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢

報知新聞記者佐瀬醉樸君著 **當代の傑物** 上製 金文字入 正價六拾錢 郵稅八錢

實業之日本記者石井白露君著 **最近成功十傑** 全一冊 美本 正價五拾錢 郵稅六錢



● 福田琴月君著 上製 金文字入 正價 六拾八錢

● 偉人の少年時代 大版上製金文字入 正價 五拾五錢

● 中野觀象君著 大版上製金文字入 正價 六拾八錢

● 最新外國商業地理 大版上製金文字入 正價 六拾八錢

● 宮田千年君著 大版上製金文字入 正價 六拾八錢

● 世界商業史綱 大版上製金文字入 正價 六拾八錢

● 大隈伯序 福田琴月君新著 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 世界偉人傳 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 加藤政之助君著 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 滿洲處分 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 長谷川宇太治君著 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 渡清案內 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 市吉徹夫君著 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

● 地理と商品 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢

大隈伯序三宅有賀田中館 博士追懷文 薄田斬雲君著 大版全一冊 正價 五拾八錢

● 天下の記者 大版全一冊 正價 五拾八錢

● 鈴木光次郎君著 中版全一冊 正價 四拾錢

● 現代名流奇談 中版全一冊 正價 四拾錢

● 桑谷克堂君著 全一冊 正價 五拾錢

● 成功富豪の面影 全一冊 正價 五拾錢

● 秘訣 全一冊 正價 五拾錢

● 實業之日本社編纂 全一冊 正價 五拾錢

● 日富豪の家風 全一冊 正價 五拾錢

● 京都大學圖書館員 佐竹義繼君編 上製 金文字入 正價 壹圓五拾錢

● 幕末勤王烈士手翰抄 上製 金文字入 正價 壹圓五拾錢

● 前カラチン女學堂教頭 一宮操子女史著 大版上製金文字入 正價 八拾錢

● 蒙古土產 大版上製金文字入 正價 八拾錢

● 經濟產業書類

● 專修學校法政大學教師法學士 工藤重義君著 大版上製金文字入 正價 壹圓貳拾錢

● 經濟財政要義 大版上製金文字入 正價 壹圓貳拾錢

● 米國エグルトン氏著 中版全一冊 正價 四拾錢

● 處世經濟法 中版全一冊 正價 四拾錢

● 米國イリ博士 クキツクワ博士共著 大版上製金文字入 正價 壹圓

● 經濟學提要 大版上製金文字入 正價 壹圓

米國ゼンクス博士原著 別府丑太郎君譯述 大版上製金文字入 正價 八拾錢

● 產業合同論 大版上製金文字入 正價 八拾錢

● 商業學士 小林行昌君 土屋長吉君共著 大版全一冊 正價 四拾錢

● 中等經濟學 大版全一冊 正價 四拾錢

● 土屋長吉君著 大版全一冊 正價 四拾錢

● 應用經濟學 大版全一冊 正價 四拾錢

● 淺井藤侃君著 大版全一冊 正價 四拾錢

● 最新農業經營 大版全一冊 正價 四拾錢

● 宮入良右衛門君著 大版全一冊 正價 四拾錢

● 經濟的育蠶法 大版全一冊 正價 四拾錢

● カネキ翁著 伊藤重次郎君譯 洋裝全一冊 正價 四拾錢

● 富の福音 洋裝全一冊 正價 四拾錢



川上善兵衛君著 大版上製金文字入 正價壹圓八拾錢 郵稅拾貳錢

●葡 萄 提 要 正價壹圓八拾錢 郵稅拾貳錢

法學博士天野爲之君新著 菊版上製金文字入 正價貳圓五拾錢 郵稅小包十八錢

●經 濟 策 論 正價貳圓五拾錢 郵稅小包十八錢

### ●衛生書類

醫師武藤喜作君著 中版全一 正價四拾六錢 郵稅八錢

●家庭應急手當法 中版全一 正價四拾六錢 郵稅八錢

報知新聞記者中村木公君著 中版金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

○名家長壽實歷談 中版金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

英國グランヰキル博士著 海獄生譯 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●簡易安眠法 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

英國グランヰキル博士著 海獄生譯 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●神經健全法 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

蘆川忠雄君著 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●頭腦明快法 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

英國グランヰキル博士著 蘆川忠雄君著 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●最新記憶法 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

醫學士樫田十次郎君著 袖珍 正價四錢 郵稅四錢

●衛生十二月 袖珍 正價四錢 郵稅四錢

東京朝日新聞記者杉村縱橫君著 中版全一 正價五拾六錢 郵稅六錢

●肺病全快談 中版全一 正價五拾六錢 郵稅六錢

農學博士玉利喜造君著 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●冷水浴の實驗と學理 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

萬朝報記者 中島氣崢君著 大版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●禁酒の五年間 大版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

醫學博士加藤照磨君校閱 西谷龍顯君譯著 全一册美本 正價七拾六錢 郵稅六錢

●最新育兒法 全一册美本 正價七拾六錢 郵稅六錢

英國ノールソン著海獄生譯 中版全一 正價四拾錢 郵稅四錢

●思想健全法 中版全一 正價四拾錢 郵稅四錢

蘆川忠雄君著 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●心機轉換法 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

### ●商業實務書類

米國ウォルター、デー、ム ッデイー著堀内新泉君譯 大版全一 正價五拾八錢 郵稅八錢

●店頭新販賣術 大版全一 正價五拾八錢 郵稅八錢

金澤商業學校長中野觀象君編 鳥山觀成君書 和本習字手習 正價六拾四錢 郵稅四錢

●實用商業文練習帖 和本習字手習 正價六拾四錢 郵稅四錢

土屋長吉君著 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

●商戰必勝 中版全一 正價廿五錢 郵稅四錢

土屋長吉君著 大版全一 正價五拾六錢 郵稅六錢

●商工執務法 大版全一 正價五拾六錢 郵稅六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯 大版全一 正價卅五錢 郵稅六錢

●實業の鍵 大版全一 正價卅五錢 郵稅六錢



前金澤商業學校長 永野耕造君著

●商業修身訓

正上中下三册  
郵稅四拾五錢

中野觀象君著

●實用商業書信文範

正大版全一册  
郵稅四拾八錢

商業學士 小林行昌君著

●英文商用文教科書

正大版上製金文字入  
郵稅四拾五錢

カ―ネギ―翁著 小池靖一君譯述

●實業の帝國

附錄カ翁評傳  
正價卅五錢  
郵稅六錢

カ―ネギ―翁著 伊藤重次郎君譯

●富の福音

正洋裝全一册  
郵稅四拾八錢

男爵前島密序 澤村菊池兩君共著

●戰捷實業指針

正大版全一册  
郵稅五拾八錢

土屋長吉君著

●簡易商業學

正上下二册  
郵稅四拾八錢

中野觀象君著

●最新外國商業地理

正大版上製金文字入  
郵稅五拾五錢

宮田千年君著

●世界商業史

正大版上製金文字入  
郵稅六拾八錢

男爵後藤新平君序 西村正確君著

●最新事務法

正袖珍上製金文字入  
郵稅六拾錢

商業學士小林行昌君 下平精一君共著

●英國商業實務

正大版上製金文字入  
郵稅壹圓廿二錢

實業之日本記者 都倉義一君著

●最新式記帳法

正大版全一册  
郵稅七拾八錢

藤岡秀太郎君著

●商品と其荷造法

正大版全一册  
郵稅五拾六錢

惣崎貞夫君著

●生命保險提要

正大版全一册  
郵稅五拾六錢

市吉徹夫君著

●銀行と社會

正中版全一册  
郵稅廿五錢

土屋長吉君著

●商品と商業經營

正中版全一册  
郵稅卅五錢

土屋長吉君著

●最新販賣術

正中版全一册  
郵稅五拾六錢

土屋長吉君著

●商業繁榮策

正中版全一册  
郵稅五拾六錢

土屋長吉君著

●最新商業要綱

正上製正價八拾  
錢並製七拾  
錢郵稅各八錢

中野觀象君著

●改良單式簿記

正大版全一册  
郵稅卅五錢

千代田生命保險會社會計課長與石丑太郎君著

●利廻早見表

正大版全一册  
郵稅卅五錢

近江屋質店員 奥村喜一郎君著

●新實業讀本

和裝全一册美本  
正價廿五錢  
郵稅四錢

五十嵐次郎君著

●最新商業算術

正上製金文字入  
郵稅八拾錢

西岡英太郎君著

●商賈と勘定

正中版全一册  
郵稅四拾八錢

中野觀象君 高間昭君共著

●新商業書信活法

正大版全一册  
郵稅五拾八錢



竹内正太郎君著 ●商業簿記獨習書 正全一册美木 稅價七拾八錢

竹内正太郎君 村塚玄君共著

●最新商業範記 正全一册 稅價六拾六錢

市吉徹夫君著 ●地理と商品 正全一册 稅價廿五錢

朝鮮日日新聞社著 ●百圓の渡韓成功法 正全一册 稅價三十五錢

桑谷克堂君著 ●成功富豪の面影 正全一册美木 稅價五拾六錢

篠田鑛造君著 ●通俗小僧學問 正袖珍總振假名 稅價貳拾四錢

波多野烏峯君著 ●新自助論 正全一册 稅價五拾六錢

岡三慶君著 ●新編武士道實話 正上製金文字入 稅價八拾八錢

波多野烏峯君著 ●健全なる常識 正全一册 稅價壹拾八錢

蘆川忠雄君著 ●沈着心修養 正全一册 稅價卅五錢

蘆川忠雄君著 ●交際術修養 正全一册 稅價壹拾八錢

樋口配天君著 ●默想 正全一册 稅價卅五錢

蘆川忠雄君著 ●日常の言語 正全一册 稅價卅五錢

西岡英夫君著 ●立身の繁昌 正全一册 稅價廿五錢

在米、柿西藤一郎君著 ●米國の商店 正全一册 稅價五拾六錢

●修養書類

蘆川忠雄君著 ●品性の勢力 正全一册 稅價壹拾八錢

米國前大統領ルーズヴェルト氏原著 山崎梅處君譯述 ●ルーズヴェルト全集 正全一册 稅價壹拾八錢

蘆川忠雄君著 ●自助の精神 正全一册 稅價卅五錢

高須梅溪君著 ●人格の鍛鍊 正全一册 稅價卅五錢

高須梅溪君著 ●偉人修養の徑路 正全一册 稅價五拾六錢

雨宮敬次郎君著 ●奮闘吐血錄 正全一册 稅價六拾六錢

蘆川忠雄君著 ●意志の鍛練 正全一册 稅價卅五錢

蘆川忠雄君著 ●讀心術修養 正全一册 稅價卅五錢

蘆川忠雄君著 山崎清風君共著 ●克己心の修養 正全一册 稅價壹拾八錢



江口岳東君著

●人格の光輝

大版全一冊  
正價六十八錢  
郵稅八錢

獨逸マイアー氏著 波多野烏峯君著

●樂天の勝利

大版全一冊  
正價四十六錢  
郵稅六錢

實業之日本記者 岳淵生著 (公開狀)

●新時代の青年

中版全一冊  
正價四十六錢  
郵稅六錢

文學博士井上哲次郎君校閱 植村道次郎君著

●教育勅語要義

大版頗美本  
正價廿五錢  
郵稅四錢

米國マーデン翁著 波多野烏峯君譯述

●快活なる精心

中版全一冊  
正價四十二錢  
郵稅四錢

法學博士和田垣謙三君序 蘆川忠雄君著

●人生の慰安

大版全一冊  
正價五十八錢  
郵稅八錢

鳥田三郎君序 蘆川忠雄君著

●常識の修養

大版全一冊  
正價五十八錢  
郵稅八錢

男爵澁澤榮一君序 蘆川忠雄君著

●實務才幹訓練

大版全一冊  
正價五十八錢  
郵稅八錢

男爵前島密君序 蘆川忠雄君著

●人生の奮闘

大版全一冊  
正價五十六錢  
郵稅六錢

英國男爵エーヴベリ卿 ラボック著 正木照藏君譯

●人生の妙味

大版上製金文字八  
正價八拾八錢  
郵稅八錢

伯爵大隈重信君序 蘆川忠雄君著

●樂天の生活

大版全一冊  
正價五十八錢  
郵稅八錢

實業之日本記者岳淵生著

●品性の光輝

中版全一冊  
正價廿五錢  
郵稅六錢

蘆川忠雄君著

●心機轉換法

中版全一冊  
正價廿五錢  
郵稅四錢

米國トマス、ラーチング氏著 堀内新泉譯述

●不平慰安法

大版全一冊  
正價卅五錢  
郵稅六錢

蘆川忠雄君著

●觀察力修養

中版全一冊  
正價卅五錢  
郵稅四錢

英國フリエス氏著 蘆川忠雄君譯述

●雄健の氣象

中版全一冊  
正價四拾錢  
郵稅四錢

堀内新泉君著

●自 術

中版全一冊  
正價五十六錢  
郵稅六錢

蘆川忠雄君著

●決斷力修養

中版全一冊  
正價卅五錢  
郵稅四錢

實業之日本臨時增刊

●勇者の世界

大版全一冊  
正價廿二錢  
郵稅貳錢

實業之日本臨時增刊

●人格の修養

大版全一冊  
正價廿五錢  
郵稅壹錢

蘆川忠雄君著

●人格の鍛鍊

中版全一冊  
正價三十五錢  
郵稅四錢

佛國大問屋主人ビエール著

●成功商才修養の實驗

前田越嶺君譯述  
中版全一冊  
正價五拾錢  
郵稅六錢

野田叱電君著

●青年立身訓

中版全一冊  
正價四拾錢  
郵稅四錢



●語學數學書類

- 盧川忠雄君著 失敗の活用 中版全一冊 正價三拾五錢 郵稅四錢
- 高橋男序 波多野烏峯君著 實業 自尊の修養 大版全一冊 正價八拾錢 郵稅八錢
- 藤原楚水君編 先哲座右銘全集 中版全一冊 正價壹圓 郵稅八錢
- 海老名彈正君著 遺訓 上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢
- 新國民の修養 大版全一冊 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢
- ルーズヴェルト氏著 奮闘の教訓 大版全一冊 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢
- 山崎梅處君 松宮春一郎君共著 農法學博士 新渡戸稻造君著 養 大版上製箱入 正價壹圓七十錢 郵稅十貳錢
- 慶應義塾々々長 鎌田榮吉君著 獨立自尊 大版上製箱入 正價壹圓七十錢 郵稅十貳錢
- 高橋五郎君著 英語正確使用法 上製金文字入 正價六拾錢 郵稅六錢
- 上海同文書院校友谷原孝太郎君著 日清英會話 上製紙函入 正價壹圓 郵稅八錢
- 高橋五郎君著 英語熟達法 中版全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢
- 高橋五郎君著 英語句讀法 中版全一冊 正價六拾錢 郵稅六錢
- 米國理學士大木新三君 鈴木精一君共著 新代數難問詳解 上製金文字入 正價七拾錢 郵稅六錢

- 渡邊徳兵衛君 小里運八君共著 實用珠算教科書 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅八錢
- 高間、上田、中宮三君共著 最新珠算全書 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 五十嵐次郎君著 最新商業算術 上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

●婦人家庭書類

- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 花 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢
- 山方香峯君著 日常生活衣食住 大版上製金文字入 正價壹圓廿錢 郵稅小包十二錢

- 梅田嬌葉君著 和洋新案菓子製法 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅八錢
- 報知新聞記者 中村木公君編 名流婦人のかかみ 大版上製金文字入 正價七拾錢 郵稅八錢
- 醫師 武藤喜作君著 家庭應急手當法 中版全一冊 正價四拾錢 郵稅四錢
- 實踐女學校講師 長谷川岩吉君述 刺繡獨習法 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 折紙と圖書 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢



齋田燭英君著

●家庭菓子製法

全一册美本  
正價五拾六錢  
郵稅六錢

村井弦齋君著

●婦人の日常生活法

特別上製壹圓廿錢郵稅拾貳錢  
並製美本壹圓郵稅八錢

石塚月亭君編

●弦齋夫人の料理

第一編第二編第三編三册  
正價各六拾錢  
郵稅八錢

東京職工學校教諭 本間鶴治君著

●俗家庭理科

大版全一册  
正價七拾八錢  
郵稅八錢

西谷龍顯君著

●太郎の母の答

中版全一册  
正價四拾錢  
郵稅四錢

堀内新泉君著

●娘に與母の書簡

前編四拾錢郵稅六錢  
後編五拾錢郵稅八錢

中島文學博士序 長野縣高等女學校長 波多野市松君著

●子供の研究

大版上製金文字入  
正價七拾八錢  
郵稅八錢

三輪田眞佐子女史序 阿部長咲君著

●健全なる家庭

中版全一册  
正價廿五錢  
郵稅四錢

實業之日本社編纂

●日本富豪の家風

全一册美本  
正價五拾六錢  
郵稅六錢

日本石油會社會計課長 竹田常治君著

●實用會計簿記

大版全一册  
正價四拾六錢  
郵稅六錢

婦人世界臨時增刊

●食物かがみ

菊版全一册  
正價拾五錢  
郵稅壹錢五厘

婦人世界臨時增刊

●婦人の慰藉

菊版全一册  
正價拾五錢  
郵稅壹錢五厘

報知新聞記者 天野誠齋君編

●家庭日常の實驗

大版全一册  
正價四拾六錢  
郵稅六錢

米國女記者ベエン氏著 實業之日本社翻譯

●女子處生訓

三百五十五頁  
正價卅五錢  
十餘頁郵稅六錢

赤堀吉松、赤堀峯吉、赤堀菊子三君共著

●日本料理法

大版一册美本  
正價七拾八錢  
郵稅八錢

婦人世界臨時增刊

●衣裳かがみ

菊版全一册  
正價拾五錢  
郵稅壹錢五厘

西谷龍顯君著

●婦人の重寶

大版全一册  
正價五拾六錢  
郵稅五錢

加藤醫學博士校閱 西谷龍顯君譯述

●最新育兒法

全一册美本  
正價七拾六錢  
郵稅六錢

婦人世界臨時增刊

●樂しき婦人

菊版全一册  
正價拾五錢  
郵稅壹錢五厘

木内菊次郎君著

●圖畫紙細工

大版全一册  
正價五拾八錢  
郵稅八錢

白井悦子女史著

●家庭衛生料理法

大版全一册  
正價五拾八錢  
郵稅八錢

松葉靜和女史著

●造花實習

大版全一册  
正價六拾八錢  
郵稅八錢

下田歌子女史著

●婦人常識の養成

大版全一册  
正價壹圓五拾錢  
郵稅八錢

秤石齋文雅著

●諸流盆石指南

大版全一册  
正價六拾八錢  
郵稅八錢

讀賣新聞家庭記者 中村秋人君著

●兒童淚と鞭

中版全一册  
正價參拾五錢  
郵稅四錢



天野誠齋君著 ●家事實習法 大版全一册 郵稅價四拾六錢

米國婦人ウキルコツクス女史原著 ●婦人の新修養 大版全一册 郵稅價五拾八錢

三津木春影君譯 ●婦人及男子の參考 大版全一册 郵稅價貳拾八錢

村井弦齋君著 ●婦人及男子の參考 大版全一册 郵稅價貳拾八錢

木内菊次郎君著 ●最新手工科教授法 大版全一册 郵稅價卅五錢

文學士 堀田相爾君著 ●家庭教育の仕方 中版全一册 郵稅價卅六錢

井上民子女史著 ●烈婦大和撫子 中版全一册 郵稅價四十五錢

美譯 ●村井弦齋君著 大版全一册 郵稅價壹拾八錢

少女讀本

讀賣新聞家庭記者 中村秋人著 ●幼兒情と嬉 中版全一册 郵稅價四拾六錢

三津木春影君著 ●皇帝少年旅行 中版全一册 郵稅價四拾六錢

●調見 木村勉君編 ●古插花の栞 大版全一册 郵稅價壹圓五十錢

●流挿花の栞 小包料十二錢

東草水君著 ●夏やすみ 中版全一册 郵稅價四拾六錢

下田歌子女史著 ●婦入禮法 大版全一册 郵稅價壹圓五十錢

渡邊白水君著 ●少女女美談 並製上稅各六拾五錢

村田天籟君著 ●婦人の心理 大版全一册 郵稅價六拾八錢

●處世書類

富益、鈴木、田中君合著 ●實園藝全書 大版全一册 郵稅價貳十二錢

前田越嶺君著 ●生存競争法 大版全一册 郵稅價五拾八錢

蘆川忠雄君著 ●最良の機會 中版全一册 郵稅價卅五錢

團田孝吉君序 波多野烏峯君著 ●紳士と社交 上製金文字入 郵稅價七拾八錢

ジョンソン氏著 山崎梅處君譯述 ●向上的處世法 大版全一册 郵稅價五拾八錢

蘆川忠雄君著 ●日常の言語 中版全一册 郵稅價卅五錢

ミラー博士著 波多野烏峯君譯述 ●光榮ある生涯 中版全一册 郵稅價四拾六錢

マシユース博士著 江口岳東君譯 ●處世術修養 大版全一册 郵稅價壹圓貳拾錢

蘆川忠雄君著 ●樂天の生活 大版全一册 郵稅價五拾八錢

●樂天の生活 實業之日本臨時增刊 大版全一册 郵稅價廿二錢

●新時代の奮闘 實業之日本臨時增刊 大版全一册 郵稅價廿二錢

●樂天的處世法 實業之日本編纂 大版全一册 郵稅價廿二錢

●成功座右銘 男爵辻新次君序 波多野烏峯君著 大版全一册 郵稅價壹拾四錢

●逆境離脱策 大版全一册 郵稅價壹拾四錢



天野誠齋君著 ●家事實習法 大版全一拾錢 郵稅六錢

米國婦人ウキルコックス女史原著 三津木春影君譯 ●婦人の新修養 大版全一拾錢 郵稅五錢

村井弦齋君著 ●婦人及男子の參考 大版全一拾錢 郵稅貳圓

木内菊次郎君著 ●最新手工科教授法 大版全一拾錢 郵稅卅五錢

文學士 堀田相爾君著 ●家庭教育の仕方 中版全一拾錢 郵稅卅六錢

井上民子女史著 ●烈婦大和撫子 中版全一拾錢 郵稅四十五錢

美譯 ●少女讀本 大版全一拾錢 郵稅壹圓

讀賣新聞家庭記者 中村秋人著 ●幼兒情と羨 中版全一拾錢 郵稅四錢

三津木春影君著 ●皇帝少年旅行 中版全一拾錢 郵稅四錢

木村勉君編 ●古插花の栞 大版全一拾錢 郵稅貳圓

東草水君著 ●夏やすみ 中版全一拾錢 郵稅四錢

下田歌子女史著 ●婦入禮法 大版全一拾錢 郵稅壹圓

渡邊白水君著 ●少女女美談 並製上稅各六拾五錢

村田天籟君著 ●婦人の心理 大版全一拾錢 郵稅六錢

富益、鈴木、田中君合著 ●實園藝全書 大版全一拾錢 郵稅貳圓

●處世書類

前田越嶺君著 ●生存競争法 大版全一拾錢 郵稅五錢

蘆川忠雄君著 ●最良の機會 中版全一拾錢 郵稅卅五錢

園田孝吉君序 波多野烏峯君著 ●紳士と社交 上製金文字入 郵稅七拾八錢

ジョンソン氏著 山崎梅處君譯 ●向上的處世法 大版全一拾錢 郵稅五錢

蘆川忠雄君著 ●日常の言語 中版全一拾錢 郵稅卅五錢

ミラー博士著 波多野烏峯君譯 ●光榮ある生涯 中版全一拾錢 郵稅四錢

マシュー博士著 江口岳東君譯 ●處世術修養 大版全一拾錢 郵稅壹圓

蘆川忠雄君著 ●樂天の生活 大版全一拾錢 郵稅五錢

實業之日本臨時增刊 ●新時代の奮闘 大版全一拾錢 郵稅廿二錢

實業之日本臨時增刊 ●樂天的處世法 大版全一拾錢 郵稅廿二錢

實業之日本編纂 ●成功座右銘 袖珍美本 郵稅拾四錢

男爵辻新次君序 波多野烏峯君著 ●逆境離脱策 大版上製金文字入 郵稅壹圓



- 米國エグストン氏著 蘆川忠雄君譯 ●處世經濟法 中版全一冊 正價四冊 郵稅四錢
- 波多野烏峯君譯 ●處世の標準 中版全一冊 正價四冊 郵稅四錢
- 英國リッチー氏著 山崎梅處君譯 ●富豪實驗教訓 大版全一冊 正價六冊 郵稅八錢
- 實業之日本臨時增刊 ●同情の勢力 大版全一冊 正價廿八錢 郵稅四錢
- 波多野烏峯君著 ●社會側面觀 上製金文字入 正價七拾八錢 郵稅八錢
- 實業之日本社編纂 ●處世座右訓 袖珍美本 正價貳拾錢 郵稅貳錢
- 實業之日本社編纂 ●成功錦囊 中版全一冊 正價六冊 郵稅六錢

- 蘆川忠雄君著 ●應對談話法 中版全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢
- ゼローム氏著 波多野烏峯君譯 ●表裏人生の真相 中版全一冊 正價四拾六錢 郵稅六錢
- 米國富豪グラハム翁書信 實業之日本社譯 ●成功者處世教訓 中版全一冊 正價四拾八錢 郵稅八錢
- 米國ジョン、グラハム翁著(右の原著) ●英文處世教訓 中版全一冊 正價卅五錢 郵稅四錢
- 實業之日本臨時增刊 ●處世の金科玉條 大版全一冊 正價廿貳錢 郵稅貳錢
- 何原智岐君著 ●四書處世經典 袖珍上製金文字入 正價三拾六錢 郵稅四錢

●雜書類

- 大勳位伊藤公題字大隈伯爵自序江森泰吉君編 ●大隈伯百話 大版上製金文字入 正價貳圓八拾錢 書留小包十八錢
- 米國エール大學教授哲學博士 朝河貫一君著 ●日本の禍機 大版全一冊 正價五拾八錢 郵稅八錢
- 實業之日本記者 嬌溢生著 ●獨笑珍話 袖珍美本 正價四拾六錢 郵稅六錢
- 伯爵大隈重信君序 島田三郎君序 三宅磐君著 ●都市の研究 上製金文字入 正價七拾八錢 郵稅八錢

- 山崎梅處君譯述 ●ルーズヴェルト全集 大版上製金文字入 正價壹圓八錢 郵稅八錢
- 英國リチャードソン氏著 實業之日本社譯述 ●最新讀書法 中版全一冊 正價四拾六錢 郵稅六錢
- 山方香峰君著 ●讀書便覽 三六版美本 正價卅四錢 郵稅四錢
- 實業之日本社編 ●東西發奮の動機 上製金文字入 正價壹圓拾錢 郵稅八錢
- 佐藤青吟君著 ●學生の前途 中版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 大隈伯序 永井柳太郎君著 ●英人思ひ出の記 中版全一冊 正價八拾一錢 郵稅八錢
- 氣質思ひ出の記 中版全一冊 正價八拾一錢 郵稅八錢



最新刊書籍

伯爵大隈重信君、島田三郎君序、三宅啓君著  
 ●都市の研究 上製金文字 正價七拾八錢 郵稅八錢

高須梅溪君著  
 ●滑稽趣味の研究 中版全一冊 正價六十一錢 郵稅六錢

文學士 藤田篤君著  
 ●實用文字便覽 袖珍五十五錢 正價五拾六錢 郵稅四錢

實業之日本社編  
 ●優等學生勉強法 袖珍並製 正價貳拾四錢 郵稅四錢

加治木常樹君編  
 ●西郷南洲書簡集 大版上製 正價九十八錢 郵稅八錢

木村 勉君篇  
 ●古插花の栞 大版上製頗美本 正價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢

三津木春影君譯  
 ●皇帝少年旅行 中版全一冊 正價四十一錢 郵稅六錢

柿西藤一郎君著  
 ●米國の商店 中版全一冊 正價五拾一錢 郵稅六錢

東草水君著  
 ●夏やすみ 中版全一冊 正價四十一錢 郵稅六錢

下田歌子女史著  
 ●婦人の禮法 大版上製 正價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢

村田天籟君著  
 ●婦人の心理 大版並製 正價六拾八錢 郵稅八錢

渡邊白水君著  
 ●少女美談 上製七拾五錢 並製六拾八錢 郵稅各八錢

島田元麿、東草水合作  
 ●青い鳥 中版正價卅錢 美本郵稅四錢

星野水裏君著  
 ●口語詩濱千鳥 中版正價廿五錢 美本郵稅四錢

農法學博士 新渡戸稻造君著  
 ●養 大版上製箱入 正價壹圓七十錢 郵稅十二錢

慶應義塾々々長 鎌田榮吉君著  
 ●獨立自尊 大版上製箱入 正價壹圓七十錢 郵稅十二錢

富益、鈴木、田中君合著  
 ●實用園藝全書 大版上製箱入 正價貳拾貳圓 郵稅貳圓

讀賣新聞記者 松川次郎君著  
 ●南米と南洋 中版美拾貳圓 正價五拾十錢 郵稅六錢

手紙雜誌主幹 桑山春風君著  
 ●男女家庭書簡 中版正價七十錢 美本郵稅八錢

文學士 岩佐重一君著  
 ●烈婦の面影 大版上製 正價七十錢 郵稅八錢

高須梅溪君著  
 ●新時代普通文中 中版正價五十錢 全一冊郵稅六錢

新渡戸、坪内、和田垣三博士監修  
 ●英俗語熟語故事大辭典 上製大版 正價四圓五十錢 脊皮美本 小包送料十八錢

報知新聞記者 鹿島櫻堂君著  
 ●江藤新平 中版正價四十錢 全一冊郵稅六錢

篠原祿次君著  
 ●地方青年團の組織及事業 中版正價五十錢 全一冊郵稅六錢



實業之日本 發行社日業  
**誌雜大五**

- 土屋長吉君著 ● 實踐會計整理法 大版正價五十錢 全一册郵稅六錢
- 嬌溢生著 ● 名士奇聞錄 三五版正價五十錢 頗美本郵稅六錢
- 文學博士 谷本富君著 ● 女子教育 目下印刷中
- 日本女子大學校長 成瀬仁藏君著 ● 進步と教育 目下印刷中
- 高濱虛子著 ● 小朝 鮮 目下印刷中
- 井上民子女史著 ● 山田琴歌詳解 目下印刷中
- 藤波芙蓉君著 ● 合せ鏡 目下印刷中

農法學博士 新渡戸稻造君著  
 ● 世渡の道 目下印刷中

▲ 實業之日本

▲ 一册拾壹錢 郵稅一錢 ▲ 每月二回一日十  
 五日發行 春秋二回增刊 ▲ 半年分增刊 郵稅  
 共壹圓五十五錢 ▲ 一年分增刊 共三圓

▲ 婦人世界

▲ 一册拾五錢 郵稅一錢 五厘 ▲ 每月一回一  
 日發行 春秋二回增刊 ▲ 半年分增刊 郵稅共  
 壹圓五錢 ▲ 一年分增刊 共貳圓五錢

▲ 日本少年

▲ 一册拾錢 郵稅一錢 ▲ 每月一回一日發行  
 春秋二回增刊 ▲ 半年分增刊 郵稅共七十錢  
 ▲ 一年分同壹圓三十五錢

▲ 少女の友

▲ 一册拾錢 郵稅一錢 ▲ 每月一回一日發行  
 春秋二回增刊 ▲ 半年分增刊 郵稅共七十錢  
 ▲ 一年分同壹圓三十五錢

▲ 幼年の友

▲ 一册拾錢 郵稅五厘 ▲ 每月一回一日發行  
 ▲ 六册郵稅共五十八錢 ▲ 十二册同壹圓拾  
 錢



十年の経験と二千通の寄書をして参考にする理想の日記

明治四十五年度

重要日記

定價五十錢

郵内地八錢  
稅清鮮樺臺參拾錢

懷中ノート

定價十八錢

郵内地貳錢  
稅清鮮樺臺貳錢

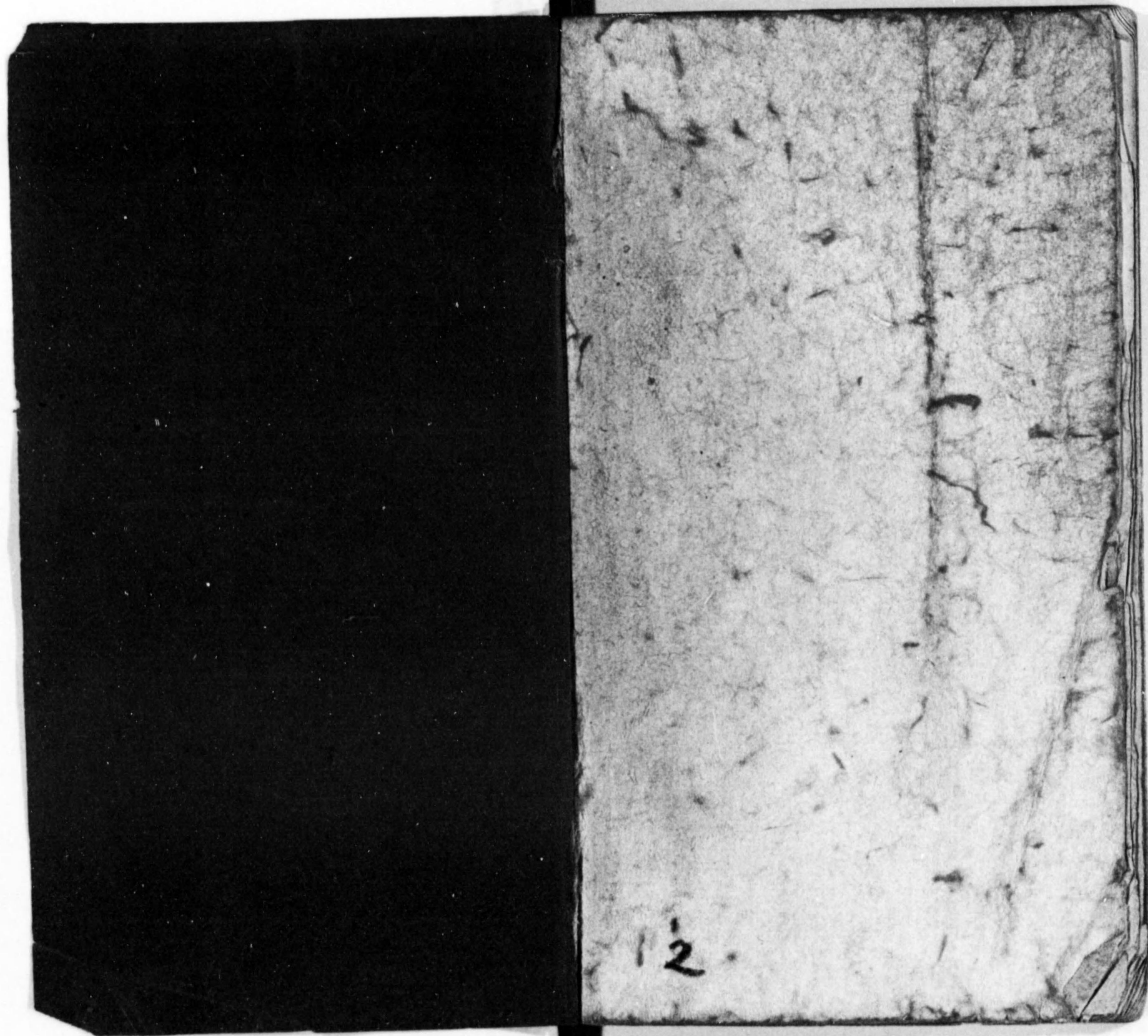
本誌の特色

紙質	ペンで書いてもインキのニジム憂毫もなし……………
舊曆	毎月の朔日満月を表として一見の本に收めたり……………
豫定欄	發信受信欄を擴張して細密なる記入に適せしむ……………
金錢出納録	使用者の希望に依り實用を旨として別冊の家計簿を用ふるが如し……………
附録	恰も一小百科辭典の如し……………
懷中ノート	は重要日記を小形として携帯に便せり……………



29  
388



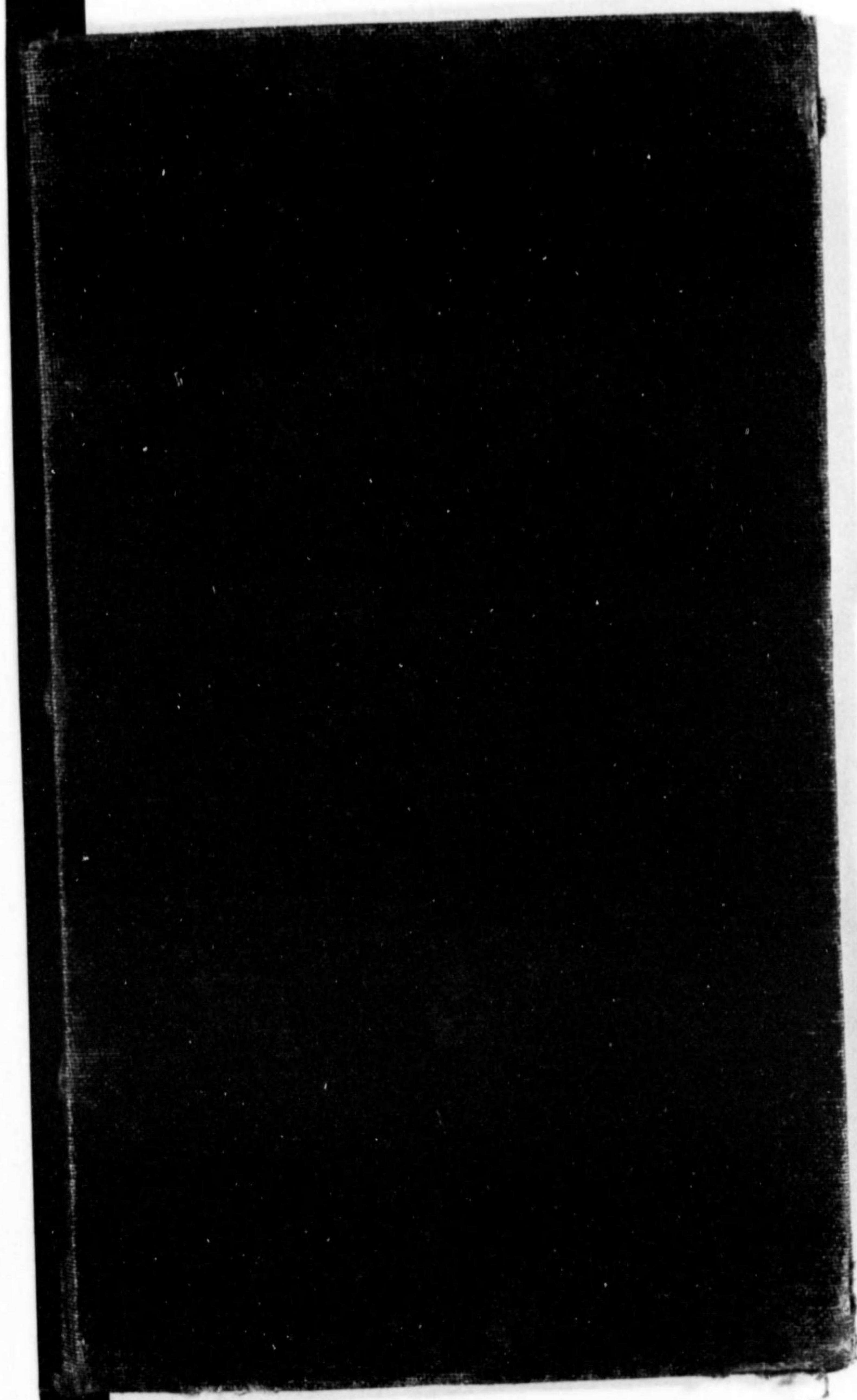


12



29
388







29

388

005064-000-2

29-388

名士奇聞錄

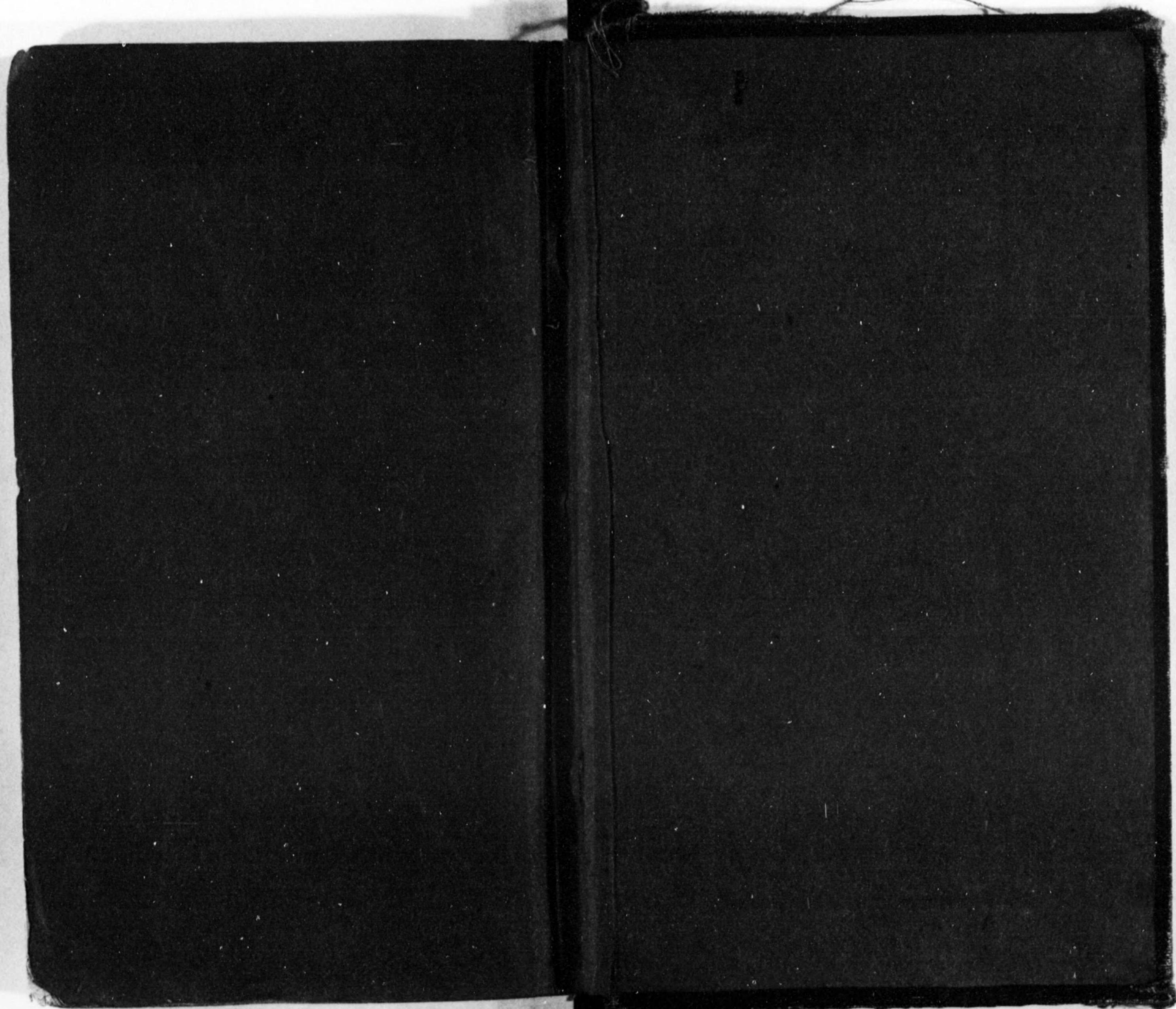
橋溢生／著

M44

ACE-1858











27  
388

名  
世  
舟  
印



